

二度目の人生をリリカルで乙

D, J

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前回はこちら（<https://syosetu.org/novel/247281/>）

「転生者大戦から暫く……」

しばらく、平和な日々を過ごしていた拓海だったが、「A's」へと移る物語は、新たな戦いを呼び寄せる。

……だが、物語は既に狂っていた。

そこそこウケた「二度目の人生をリリカルで」、まさかの続編スター

ト！

## 目次

序章「これまでのあらすじ、これからの始まり」

プロローグ1 | 1

プロローグ2 | 8

プロローグ3 | 13

第1章「夏だ！水着だ！イカ怪獣だ！」

第1話 | 17

第2話 | 23

第3話 | 30

第4話 | 37

第2章「イタリア料理を食べに行こう」

第5話 | 45

第6話 | 50

第7話 | 56

第8話 | 61

第3章「戦いへの序章・前編」

第9話 | 69

第10話 | 75

第11話 | 82

第12話 | 88

第4章「戦いへの序章・後編」

第13話 | 95

第14話 | 101

第15話 | 107

第16話 | 113

第5章 「クリスマスのシヤケ騒動」

第17話

---

## 序章「これまでのあらすじ、これからの始まり」 プロローグ1

『お盛んでございますなあ』

自らの主・高尾拓海と、その保護者・桂言葉が繰り広げるインモラルな愛の情事を前に、ストレイジは呟いた。

ストレイジはどこぞのイレギュラーではない為に性欲は無い。

だが、小学生男子が女子高生にしがみついて腰を振る光景が異常である事は、一般常識として知っている。

……まあ、小学生の方は中身が30のおっさんなのだ。

そう考えると、元はキモくて金のない子供部屋おじさんである拓海が、黒髪ロング巨乳女子高生である言葉とまぐわっていると、色々とアレだ。

互いに愛し合ってはいるようだが、善意の人達が黙ってないだろう。

まあ、それはさておき。

「言姉え」「たつくん」と呼び合いながら互いを貪り合う二人を前に、あんなに激しくしたら敷き布団についたであろう血の汚れがどえらい事になるぞ、と思いながら、ストレイジは部屋にあるパソコンを起動する。

日課である、日々の日記をつける為だ。

今日は、自らの主・拓海について、今一度振り返ってみよう。

そう思いながら、ストレイジは二人の喘ぎ声を背に、パソコン内のテキストを呼び出した。

高尾拓海。

彼の前世の30年は、悲惨の一言に尽きる。

小中高校といじめの中で過ごし、妹とはあからさまに差別された。

両親を含む誰も、拓海の味方はしてくれなかった。

そして、仕事帰りにヤクザの抗争に巻き込まれ、ヤクザの一人が放った凶弾を前に倒れた。

拓海の、空虚で苦痛な30年の人生は、こうして幕を閉じた。

……だが、それは神様を名乗る、どこぞの野球実況板の住人を思わせる外見の神性のミスだった事が判明。

神様はお詫びとして、彼の「幸せな人生を送りたい」という無意識にあつた願いを聞き入れ、ある世界に転生させた。

それが、テレビアニメ「魔法少女リリカルなのは」の世界の、2004年……すなわち一期の世界。

転生先としてはベタであるが、実際リリカルなのはや、その原作である「とらいあんぐるハート」、姉妹作である「DOG DAYS」といった作品群は、基本的に善人が多い。

たしかに、拓海の転生先としてはもってこいだ。

少なくとも、元の世界よりは、大分。

そして結果どうなったかというと、神様の目論見通り、拓海は前世よりもずっと幸福な人生を9年過ごした。

「アリサ・バニングス」を筆頭に、かけがえの無い友人も出来た。

何かと自分の世話をしてくれる「桂言葉」は、美人で巨乳のお姉さん。

今までの30年が嘘のように、拓海は幸せの絶頂に居た。

……しかし、その時拓海は、そして神様すらも気付いていなかった。

転生者は、拓海一人では無かったのである。

何人も、何百、何千。

いや、もしかしたらもっと。

それらの多くが、常人はおろか、時空管理局の魔導師すら上回る力を持っていた。

仮面ライダーギルガメッシュに変身する、鎌瀬有斗。

野獣と化した先輩と呼ばれる怪人に変身する、田所。

等々が、その代表だろう。

そして、多くの転生者による影響かは定かではないが、世界その物にも変化が現れた。

1999年にアメリカに現れた「カマキラス」を皮切りに、世界中に巨大不明生物「怪獣」が姿を現すようになった。

並んで、本来「リリカルなのは」に登場しない、他作品のキャラクターも目撃されるようになった。

代表的な物を挙げるとすれば、海鳴市内で個人経営の飲食店を営む、「Fate/stay night」の主人公「衛宮士郎」が居るという。

拓海の身の回りを世話してくれる桂言葉も、元は「School Days」という別の作品の人物である。

そして転生者達の多くが、この歪んだ「リリカルなのは」の世界を自らの好きにする為に、水面下で潰し合いをするようになった。

かつてはユートピアであったこの世界は、いつしか転生者同士による蟲毒のような戦乱の世界へと変わっていった。

だが神様も、「もしも」に備えて、拓海に魔導師の資質……つまり「リンカーコア」を持たせていた。

自衛の為である為、そこまで大した物ではないのだが。とはいえ、一応転生者と戦う為の力はある。

後はそれを使う為の杖……デバイスが必要になった。そうして、神様が因果率に手を加える事で、「時空管理局」から拓海

の元に送られてきたデバイス。

それが「ストレイジ」だ。

そしてストレイジと拓海は、転生者に少しでも対抗する為、日々強くなる為の修行を重ねた。

強盗等の犯罪者を相手にした実戦訓練を重ねた為、一躍「謎のヒーロー」として少しだけ有名になったり、海鳴市の治安維持に貢献したりした。

犯罪者が減って訓練出来なくなった時に秘密基地「ユニオンベース」を発見し、そこで傀儡兵と量産型ジェミナスを発見し、新たな戦

力とした。

いやはや、ガンダムを持った魔導師は、次元世界広しと云えど拓海ぐらいでは……いや、他の転生者も居るだろう。

そんなある日の事、拓海は不慮の事故で言葉達を戦いに巻き込んでしまい、自分が転生者だという事を知られてしまう。

そして、今まで彼女達を騙していたという罪悪感もあつて、彼女達の前から姿を消してしまった。

それから一月ほど、拓海はユニオンベースに隠れるように籠った。

ストレイジは、その一月を拓海と共に過ごした。

ストレイジは、言ってみればAI、ロボットだからマシンだから、涙は流さない。

けれども、拓海がどれだけ苦しみ、追い詰められていたかは解った。

そして………決戦が起きた。

海鳴に潜伏していた転生者の多くが、拓海を抹殺する為にユニオンベースに攻撃を仕掛けたのだ。

それもその筈。

転生者の多くは「リリカルなのは」の主人公である「なのは」やその友人達である「アリサ」や「すずか」、そして後に仲間になる「フェイト」をどうにかモノにしようとする。

その一方で「ユーノ」や「クロノ」といった彼女達の近くに居る男性キャラには、殺意を露にするのだ。

アリサやすずかと親しく、おまけに親身に接してくれる言葉という美少女まで近くに居る拓海は、転生者達にとっては「何がなんでも殺さなければならぬ悪」だったのだ。

傀儡兵にドローン、そしてガンダム。

持てる全ての戦力を持って、拓海は転生者達を迎え撃った。

しかし、数で勝っていても相手は一個一個がオーバーSランクか、そうでなくともロストロギアレベルの強さ。

最初こそ、いきなり現れたガンダムIIジエミナスによる不意打ちが



成功したが、程なくして追い詰められてしまう。

だが、それを黙って見過ごす「彼等」ではない。

「時空管理局」の「クロノ」。

窮地に追い込まれた友を救う為に立ち上がった「アリサ」と「すずか」そして「セント」。

彼等の助力により、追い込まれた拓海は救出され、以前より管理局を苦しめていた転生者のほとんどが逮捕。

圧縮冷凍封印により、封じ込められた。

これが「プレシア・テストロッサ事件」の裏で進行していたもう一つの事件「転生者大戦（リンカー・ウォーズ）」の、事の巻末である。

日記を書き終えたストレイジは、ようやく大人しくなった拓海と言葉の寝息を聞きながら、一息ついた。

『……………ある意味、マスターと私は世界を守ったでございませぬあ』  
世界を崩壊させられる転生者を片付けた、というのもある。

もう一つは、「リリカルなのは」という作品の流れを守ったというの  
もあつた。

「リリカルなのは」には、主人公なのはのライバルとして「フェイト・テストロッサ」という少女が登場する。

彼女は、母親である「プレシア・テストロッサ」の為に「ジュエルシード」を集めようとして、同じくジュエルシードを集める「なのは」や「時空管理局」と敵対する。

戦いを重ねた後、フェイトとなのはは絆を結ぶ。

プレシアはフェイトが亡き娘「アリシア・テストロッサ」のクロールである事と、ジュエルシードを集めさせていたのはアリシアを復活させる為だという事。

そして、娘の紛い物であるフェイトを「愛していなかった」事を告げる。

そして、プレシアの本拠地である「時の庭園」での最終決戦の後、プレシアはアリシアの亡骸もろとも虚数空間……次元断層によって引き起こされる次元空間に空いた穴に落下し、死亡。

それが、リリカルなのは一期の物語であり、後に「プレシア・テスタロッサ事件」と呼ばれる事件の、事の巻末である。

おそらくだが、転生者達はこの事件に介入しようとしていた。

元は他の転生者の忘れ形見であるユニオンベースが、小国の軍隊並みの戦力を保存していた事から、なんとなく察する事が出来た。

だが、プレシアは原作通りに死亡し、「リリカルなのは」の歴史が狂う事は無かった。

転生者の多くが、事件の介入よりも拓海の抹殺を優先し、誰も介入しなかった為だ。

つまり所、拓海が存在がいい囲役になってくれたという訳だ。

フェイトも原作通り、時空管理局で裁判を受け、無罪を勝ち取って戻ってくるだろう。

……まあ、プロフェツサーイズミから聞いた話であるが、最終決戦でプレシアが「ハイドラガンダム」を呼び出す等、完全に原作と同じという訳にはいかなかったようだが。

「……………つと、そう言えば」

プレシア事件の事を考えていると、ストレイジはある事を思い出した。

今の「リリカルなのは」が「一期」と呼ばれているという事からも察しがつくが、この物語にはまだ「続き」がある。

そしてその「続き」には、時空管理局のある人物が関わってくるのだ。

『……………折角だし、先に調べておきましょう』

そう思ったストレイジは、クロノとプロフェツサーイズミから教えられたコードを使い、パソコンから時空管理局のサーバーにアクセスする。

流石に2004年で既に旧式に近い地球のモデルでは厳しいが、ストレイジ自体が演算等を引き受ければ。

『…………よし！』

無事、接続が成功。

フムフムと言いながら、名簿リストに目を通してゆく。

その「人物」は重要ポストの一人だから、すぐに見つかるはずだ。

『…………は？』

確かに、その「人物」は名簿に記されていた。

だが…………。

『…………り、リリカルショックだぜ』

…………ストレイジは、拓海と共に「リリカルなのは」の原作を守ったつもりでいた。

だが、その情報を前に、それが違う事を思い知った。

…………これから始まる物語の大筋は、最初から狂っていたのである。

## プロローグ2

プロフェツサーイズミ。

アースラ隊直属のデバイスマイスターであり、時空管理局の技術長官。

そして「彼」は、人間ではない。

「ふんふんふん♪」

少し前から始まったアニメ「時空勇者レイゼルバー」の主題歌を鼻歌で歌いながら、彼は本来人間なら耳がある部分にコードを繋ぎ、アースラのコンピュータを操作している。

そのコンピュータで解析しているのは、アースラの格納庫に鎮座する拓海のジェミナス。

クロノのサンダーボルト・もそうだが、管理局の科学者として、魔力で稼働する巨大ロボットは注目せざるを得なかった。

「調子はどうだい？ドク」

そんなイズミを、背後から呼ぶ声。

振り向くと、そこにはマグカップを二つ持ったクロノ・ハラオウンの姿。

「おおクロノ執務官、休憩ですか」

「ああ、ついでに提督から「ついでにドクにコーヒー持って行って」って」

「それはそれは、なら休憩としよう！」

イズミは耳のコードを外し、クロノからコーヒーを受け取る。

コーヒーを飲むイズミを、クロノがじっと見つめている。

それに気付いたイズミは、一言。

「……………どったの？」

「いや、やっぱコーヒー飲むロボットってすごいなって」

「あつたり前よお！私の持てる最高の技術で作られた身体だぞ？もはや人間と変わらずコーヒーも飲めるのだ！」

……………そう、イズミは人間ではない。

と、同時に、彼もまた拓海のように転生者でもあるのだ。

生前のプロフェッサーイズミ……。「泉龍之介（いずみ・りゅうのすけ）」は、45歳のサラリーマンだった。

自分をATMとしか思っていない妻と、思春期に突入し妻共々自分を汚物扱いしてくる娘。

そして社長が変わってから、社員を意識の高い自己満足の道具としか見なくなった会社。

会社員男性としては、考えられる限りの最悪のシチュエーションの中に、イズミは居た。

そして、ある日の事。

いつもがごとく、疲れて帰って来た深夜。

意識の高い二代目社長が、終業後の掃除なんてやらせなきや30分早く変えたのにと愚痴をつきながら、自宅の鍵をあける。

妻と娘を起こさないようにリビングに向かうと、「食べてね」という書き置きと共に置いてあるカレーライス。

イズミは嬉々として、そのカレーライスを食べた。

………思えば、この時気付くべきだったのだ。

あの妻は、いつも自分に晩飯など残してくれていないではないかと。

カレーライスを食べ終わってしばらくして、イズミを苦しみが襲った。

立ち上がれなくなり、その場に倒れる。

見れば、こちらを見て話をしている妻と娘の姿。

助けてくれ。

そう思っ手て手を伸ばすも、聞こえてきたのは「これでお金が増える」「海外旅行どこ行く?。」といった会話。

ここでイズミは、ようやく気付いた。

あの二人は、自分を保険金目当てで毒殺しようとしたのだと。

悲しかった。

悔しかった。

涙が止まらなかった。

けれども、イズミを助けてくれる者は誰もおらず、イズミは屈辱の中で意識を手放した。

そして……………。

「あの時は本当にビビった、保険金目当てで殺されたと思ったら、目の前に物理的にでかい子供がいたんだからな！」

「僕もだよ、おもちゃのロボットがいきなり話し出したからね」  
転生した。

それも、おもちゃに。

仕事で中々帰れない両親が、5歳のクロノ・ハラオウンに与えた友達ロボットに。

これが、イズミとクロノの出会いである。

その後イズミは、

クロノを狙う転生者からクロノを守って大破したり、

その度に転生者特典である天才的な頭脳を使って自らを強化・改修したり、

その頭脳を買われて管理局の技術長官になったりと、そんなこんなで今に至る。

「……………所だけだよ」

「ん？」

同じくコーヒーを飲んでいたクロノは、イズミに訪ねたい事があった。

それは。

「……………拓海君の持ってたストレイジってデバイスだけど」

「ああ、ウチで作ってた試作機だね、多分いつもの「ばら蒔き」で流出したんだろ」

「ああ……………」

「やっぱりか！」と言うかのように、クロノは天を仰ぐ。

時空管理局は、人手不足解消の為に魔導師の素質のある人間にデバイスを送り、魔導師にしようとしている。

だが、これに全ての管理局局員が賛同している訳ではない。

クロノもリンディも、そしてイズミを初めとするアースラ隊は、このやり方には反対している。

が、いくら親子二代で管理局に貢献してきた、英雄たるハラオウン家とはいえ、そこまで発言力がある訳ではない。

並んで人手不足解消の為の代案もあらず、どうにも出来ていないのが現状である。

……「リリカルなのは」一期におけるクロノの名言として有名な「世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ」というのは、父親を喪った事もだが、

時空管理局という正義の為の「はず」の組織の中で、不義や問題に対してどうにも出来ない事への苛立ちも、含まれていたのかも知れない。

「だからこそ、早い所こいつの解析を進めて、生産ラインに何かしらをのっけなきゃならん」

眼前のジェミナスを前にして、イズミは呟く。

「あれは本当に興味深い、見た目こそガンダムだが、中身は傀儡兵の発展型だ、一部のパーツは共通でもある」

「つまり、技術と設備さえ揃えば管理局・でも同じ物が作れる、と？」

「多分な」

だが、人手不足問題を解消する為の代案は、出来ようとしている。その鍵は、眼前のジェミナスにある。

そう、「ロボット兵器」の採用計画である。

既に、転生者の手によるロボット兵器の開発・運用の例は確認されている。

管理局は、これをどうにかモノに出来ないかと目をつけた。

人手が足りないなら、武装局員一人一人の戦力を、ロボット兵器を宛がう事で倍増させればいい。

読者諸君に分かりやすく説明するなら、「F o c e」の「ACE装備」のように、「デバイスの拡張品としてのロボット兵器」と言えばいいだろうか。

やや暴論気味ではあるが、管理局からすれば地獄に仏である。が、何事もそう上手くいかないのが世の中。

転生者はただでさえ強く、対峙する度に何人もの武装局員が犠牲になり、とてもロボット兵器の鹵獲などする余裕はない。

よしんば鹵獲出来たとしても、技術体系そのものがミッドチルダの魔法と別であったり、そもそもロストロギアレベルの危険物だったり、とても戦力には加えられない事がほとんどだ。

製造にミッドチルダ魔法技術が使われており、奇跡的にデバイスとの連動が可能だったクロノのサンダーボルトでさえ、

その装甲に至るまでが希少金属や高級部品の塊であり、クロノ一人の専用機としてしか運用できないという有り様。

そこに現れたのが、外装こそガンダムであるが、内部は傀儡兵の技術を応用した拓海のジェミナス。

これを作ったユニオンベースの「本来の主」が何者かは知らないが、これなら、技術と設備が揃えばミッドチルダでも複製・生産が可能だ。

『ただいま、次元標準時0時をお知らせします』

そんな事を話していると、アースラ内に0時を知らせるアナウンスが響く。

話している間に、日を跨いでしまったようだ。

「……………そういや、明後日だったっけ？墓参り」

日が変わって、ふと思いついたように、イズミがその話題を出す。そういや、そんな時期かと。

「ああ、お供えにワインを持ってくつもり」

「そうか……………にしても、時が過ぎるのは早いモンだ」

イズミは、机の上の写真。

幼少のクロノと、彼の師匠である二人の少女、そして彼女達の主であり父親である、初老の男性の写った写真を見て微笑む。

「……………グレアム提督が死んでから、もう三年か」



### プロローグ3

佐藤セントは、かつて恋をした。

だが、その恋は相手に「同性の恋人」が居たという、最悪の罨に  
まる結果に終わった。

……まあ、ある意味では「リリカルなのは」らしいオチではある。  
あれから、セントは拓海達友人にはこう語っている。

「しばらくは女の子はもういいかな」と。

まあ、小学生男子が色語彙沙汰であれこれ言うのも不自然ではある  
が。

そんなセントが居るのは、学校の近くにある図書館。

体育会系サッカー少年であるセントがいるには、場違い感を感じ  
る。

たしかに、セントも読書を嗜むような人間ではない。

だが、失恋のショックの癒しを求めるあまり、図書館に行くように  
なっていたのだ。

「……………ぶふっ」

とは言え、そこは腐っても小学生男子。

読むのはもっぱら「かいけつゾロリ」ではあるが。

さて、ゾロリを読み終えたセントは、本を元の棚に戻し、帰ろうと  
した。

すると。

「うう……………んっ」

うめき声のような苦しそうな声に気付き、セントが振り向く。

視線の先にいたのは、車椅子に座った一人の少女。

背丈や顔立ちからして、年齢はセントと近く見える。

本棚に向かって必死に手を伸ばしているが、ギリギリ届かない位置  
にあり、彼女の座高を考えても届きそうにない。

立てば届くが、彼女が車椅子から降りない事を考えると、おそらく  
一人では自立も難しいのだろう。

周りを見てみるが、彼女に手を貸そうとする者は見当たらない。元々、人が少ないのもあるが、不審者（おそらくロリコンの転生者）の多いこのご時世、下手に話しかけて通報されてもかなわない。

「……………しやあない」

が、セントは動いた。

年齢が近いのもあり、不審者とは思われまいだろう。

そして何より、セントは困っている人を見捨てて帰るほど、薄情な人間ではないからだ。

「これが取りたいのか？」

「あつ、はい、ありがとうございます」

彼女が手を伸ばしていた本を、セントは横から代わりに取り、少女に手渡す。

少女は、そんなセントに礼を言い、本を受けとる。

少々、言葉の発音が訛っている。

大阪辺りで使われる、たしか関西弁だったか？とセントは考えた。

「……………なんかかわいいな」

そんな少女の笑顔に、セントが抱いた感情はそれだった。

顔立ち自体は、クラスの女子と比べても平均ほどであり、声をあげて「かわいい！」と言う程ではない。

が、彼女から感じとる優しい波長のようなもの……………なんというか、「家庭的」な雰囲気、セントの心を掴んだ。

「き……………君、この辺の子？」

だから、だろうか。

そんなセントに似合わない、ナンパ目的のチャラ男のような台詞を口走ってしまったのは。

しまった、ノリが軽かったか。

と、セントは少し後悔した。

だが、少女は柔らかな笑顔を浮かべたまま、こう答えた。

「ええ、あたし、「八神はやて」言います」

少女……………「八神（やがみ）はやて」は、まだ気づいていない。

これから待ち受ける、波乱に満ちた運命を。

佐藤セントは、これからも知らない。

本来、ここではやてに会うのは、自分ではなかったと。

……はやての家にある、とある一冊の「本」が、目覚めの時を待つかのように、静かに佇んでいた。

同時刻。

日本の位置から、地球の裏側にあるとある場所。

南アメリカの沿岸部にある、とある施設があった。

表向きは軍の施設ではあるが、実際は怪獣を監視する為の施設だ。

近辺一帯に眠る怪獣達を監視し、有事があれば軍に連絡する。

その、嚴重な警備によつて守られている施設に、本来は立ち入らないハズの「部外者」が居た。

「仮にもアメリカの軍隊のくせに、何民間人に突破されてるのさ……そういう展開は、少年ジャンプの中だけにしてくれない？」

足元に転がる、施設を守っていた兵隊「だったもの」を蹴飛ばしながら、優男が吐き捨てる。

その眼前には、設備の再深部で監視……と言うよりかは、「封印」されている怪獣の姿。

氷付けにされてはいるものの、死んではない。

その生命力の高さは、流星は怪獣と言った所か。

「ほ、本当に、これをくれるのか……？」

「ああ、君の好きに使うといいよ」

「ふ……はははっ！やった！やったぞ!!」

優男が連れてきた男は、眠る怪獣を前に狂喜乱舞の喜びを見せる。手に入った強靱な「力」。

これがあれば、今度こそ世界を好きに出来ると。

そんな男を、優男は軽蔑するような冷たい目で見ていたが、男は気付かなかつた。

そして間を起き、優男の口許が三日月のようにつり上がる。

「さて、始めるとするか……………」主人公曇らせゲーム「はーじまーるよお?」

悪意に満ちた眩きは、ヒヤハハと笑う男によってかき消される。

狂ってしまった「リリカルなのは」という物語の歯車が、今、再び回りだした……………」

……………」

……………」第97管理外世界「地球」。

この世界に、密かに転生者達が暮らしている事は、あまり知られていない。

これは、そんな世界に生きる少年少女達の、戦いの記録である。

# 第1章 「夏だ！水着だ！イカ怪獣だ！」

## 第1話

「プレシア・テスタロッサ事件」。

そして「転生者大戦（リンカー・ウォーズ）」から、しばらく。

転生者達の行動は鳴りを潜め、ミッドチルダ、そして地球に、一時の平和が訪れていた。

そんな、ある日。

海鳴が夏……サマーシーズンに突入し、聖小も夏休みに入った。

ここ、「海鳴ビーチ」でも、海鳴に住む人々や町の外から来た観光客達が、海水浴を楽しんでいる。

「あー………やっぱこれ位の暑さが丁度いいわ、ほんと、こういうので良いんだって」

サンサンと輝く太陽を浴びながら、白いトランクス式の海パン姿の拓海が呟く。

その手には、有事に備えてブレスレット状態のストレイジの姿が。

「………未来の夏って、そんなにやべーのか？」

「やべーも何も、30度越えが普通だし」

「マジかよ………皆ゆでダコになっちゃう」

その隣には、同じく海パン姿で、シュノーケルをネックレスのようにかけたセントの姿。

拓海のように待機状態のデバイスを、ドックタグ型のネックレスにしてぶら下げているが、このデバイスについて語るのは後にしよう。

彼等と、着替え中での場に居ないアリサと言葉もまた、夏休みを利用して海水浴に来ていた。

すずかとなのはも誘う予定だった。

が、すずかは夏風邪でダウン。

なのはも家族旅行の日程が被ってしまい、彼女達を除いた面子で、

海水浴を楽しむ事になった。

何故だろう。

この仲良し五人組で何処かに遊びに行く予定を立てると、必ず誰かが欠席する、気がする。

現にこの前のビッグシャチ祭りは、セントとなのはが欠席した。

「そういや、お前のガンダムってまだ修理中なのか？」

「まあね、でも修理もあるけど、データ取りが終わるまでは帰ってこないよ」

転生者大戦で活躍……キングジョーにやられたけど……した、拓海のジェミナスTSは、現在管理局で修理&amp;amp;データ取りの真っ最中。

管理局にしても、推し進めるロボット兵器開発に役立てる為に、実戦データやその他諸々を持つジェミナスは欲しい。

拓海からしても、コンピュータ等の中枢こそ無事だったがほぼ大破同然であり、修理する技術も無い為に、管理局に一時的に預けている。どっち道、帰ってくるのは先の話だろう。

「そういや、あの秘密基地も管理局にあげちゃったんだろ？勿体ないな」

「俺一人が持つててももて余すだけだし別にいいよ、それに、もうあそこで籠城する事もないし」

ジェミナスTSと共に、転生者大戦で拓海の間となった、ドローンや傀儡兵の生産施設を持つ秘密基地ユニオンベース。

これも、拓海個人の所有物としては明らかに過剰な事と、もう必要ないという事から、管理局に譲った。

管理局側からしても、転生者の技術が手にはいるかも知れないと乗り気だった。

現在、プロフェツサイズミを中心とした探索部隊が、第二フロアより下への侵入を試みている。

と、いうのも、ユニオンベースの機能を動かしている魔力炉心は、かつて暴走事故を引き起こした、「ヒュドラ」という物。

プレシアの時の庭園に使われていた物と同じであり、事故が起きる

前に停止させなければならぬのだ。

イズミからは「何も心配はいらない」と言われたが……まあ、今出来るのは無事を祈る事だけである。

「おっまたせー！」

そんな話をしていると、背後から可愛らしい少女の声が飛んできた。

拓海達が振り向くと、そこに立っていたのは水着姿のアリサと言葉。

アリサは、自らのバリアジャケットと同じ色、ピンク色をしたセパレートタイプの水着だ。

八幡水族館で売っているシャチの浮き輪を手にした姿は、年相応の可愛さを感じさせる。

「ふふっ、どーよ！絶世の美少女アリサちゃんの水着姿は！」

「どうよって言われても……可愛いんじゃないかね？」

「似合ってるよ」

言葉を詰まらせる男性陣。

この手の展開の付き物ではあるが、確かに可愛いし似合ってるのだが、男にはそれ以上どう言えればいいのかが解らない。

「なによ、パツとしない反応ね」

むー、と、頬を膨らませるアリサ。

そんなアリサに対して、拓海は。

「気持ち解るけど、ここでエロい！とかそそる！とか言うのも逆にヤバいと思うんだ……」

「あー……言われてみれば確かに」

怒ると思いきや、ちよつと納得してしまうアリサ。

一般常識としてもそうだが、アリサはあの時……鎌瀬の差し金によつて誘拐された際に、その誘拐犯であるロリコンに襲われかけた。

幼い子供に欲情する人間の異常性も、襲われる恐怖も、身を持って体験しているのだから当然だ。

まあ、アリサのケースのように誘拐し襲うのは論外であるが、個人で誰も傷つけないように楽しむ分には、何の問題はない……はずで

ある。

「それよりも問題が……………」

「ああ……………」

「え……………私？」

口々に呟く拓海達と、その視線の先にいる事に気付き、自分に何かあるのかと驚く言葉。

その様子だと、無自覚のようだが、実は言葉の方が大変な事になっているのだ。

彼女が着ているのは、学校指定の水着……………つまり所の、スクール水着である。

曰く、友達と海に来た事など無かったので、小学校の頃からいつも家族旅行でそうしているように、スクール水着を選択したとの事。

地味で目立たないと思っていたが、周りが派手なカラフルな水着を着ている中では、逆に目立ってしまったている。

だが仮に、スクール水着が地味で目立たない状況だったとしても意味は無かつただろう。

その理由はただ一つ。

「おい、あれすげえな……………」

「でっけえ……………」

やはりというか、ビーチの視線を集中させる、そのJカップの巨乳である。

スクール水着がぱっちり張り付いて出来た、見事な乳袋。

乳房に引つ張られてパツパツになったスクール水着の布は、まるで限界まで水をいれた水風船を二つ並べたかのようだ。

競泳水着類が情欲を煽る水着として語られるようになるのは、まだ先の話である。

だが、子供の着るスクール水着に包まれた、グラマラスな言葉の女体は、一部のフェティシズムを刺激する。

……………そして拓海も、刺激される者の一人である。

「……………っ、は、恥ずかしいですね……………」

視線に気付いたのか、恥ずかしそうな顔をして、胸を隠そうとする



言葉。

とはいえ隠しきれるはずもなく、ぐにやぐにやとスライムのように変形してしまう。

男の情欲を書き立てる形をしている。

大変、エロチックである。

「……………アリサ、どうよ」

「流石の私もあれと張り合おうとは思わないわよ……………」

目が釘付けになるセントと、降参して試合放棄するアリサ。

アリサが言葉と張り合うには、あと10年近くを待たなければならぬ。

一方の拓海はというと。

「……………昨日あの胸でシてもらったんだよ……………あのおっぱいで……………」

あの巨乳が自分だけのモノである事を、ただ一人だけ知っている為か、ちよつとした優越感を感じていた。

あの日以来、身体を重ねる日は続いている。

流石に毎日とはいかないが、昨日もあの巨乳で挟んでもらったばかりだ。

無論、やってる事はばればれば犯罪なので、周りには内緒だが。

「……………アリサ、セント、ちよつと見ててくれ」

「ん？どつたの？」

「上着取ってくるー！」

とはいえ、周りの視線に晒されるのは抵抗がある。

その為拓海は、ロッカーに入れてある上着を取りに、走るのだった。

何故か前屈みで。

「……………ふふっ、すっかり彼氏さんですね」

その様を見て、「たっくんが自分に夢中になっている」事にゾクリとした快感を感じて、妖しく笑う言葉に、気づかないまま。

さて、そんな拓海達を見つめているのは、ビーチで言葉の巨乳に釘付けなスケベ野郎達だけではない。

沖合いの・方から、彼等をうらやましいそうに……と、言うよりは、怒りを込めて見つめる視線があった。

「気に食わねえ……気に食わねえっ！」

青春を謳歌する四人を前に、そいつは地団駄を踏んでわめき散らす。

その様は典型的な子供に見えたが、そいつは20代の青年である。

……恐らく、鎌瀬のように中身が子供なのだろう。

「どいつもこいつもリア充しやがって！上等だ！俺がお灸を添えてやるぜ……！」

そいつの背後から、何本も触手を生やした冒涇的な怪物が目を光らせている。

本来肉食で凶暴なその怪物だが、男を餌さとは認識せず、まるで使い魔のように男に従っている。

「ヒヒヒ！真夏のビーチには怪物が付き物だからな！B級モンスター！映画でお前らがどんな末路を辿るか！身を持って教えてやるぜエエー……！！」

ポギユウツ！ポギユアツ！

その怪物の声と、男の下衆な笑いが、重なるように響いていた。

## 第2話

「行けー！アリサシャーク号！」

「それサメじゃなくてシャチだろ?!」

アリサとセントは、海に飛び込んで遊んでいる。

一方の拓海はというと、持ってきたジャケットを羽織って素肌を隠している言葉と共に、ビーチパラソルの下で二人を見守っている。

「たつくんは行かないんですか？」

「うーん、ストレイジがちよっとね……………」

拓海の腕にブレスレット状態で巻かれたストレイジが、携帯のバイブレーションのようにガクガクブルブルと震えていた。

『海水はツ！海水はリリカルまずいでございますよツ！特に私のような精密機械はツ!!』

「デバイスが何言ってるんだよ……………」

どうやら、ネットサーフィン中に海水の腐食性やら水が機械を壊す事を知ったらしく、ストレイジは怯えていた。

ただ、ストレイジはデバイスだ。

試作機な上に、インテリジェントデバイス故に複雑なのは当然だ。だが、海水で壊れるようには出来ていないはずだ。

「レイジングハート」のような発掘品はともかく、(ミッドチルダの) 現行技術で作られた「フェイト」の「バルディッシュ」も、海水にダイブしても無事だったのだ。

けれども、無理に海水に入ってストレイジを怖がらせるのも気が引ける。

そこまでして海に入りたくもないねで、拓海はここで二人を見守っているのだ。

「あの一、そのオネイサン?」

すると、そんな空気をぶち破ってくる声の一つ。

見れば、そこにはイカニモと言うか、目に見えて解るナンパ目的のチャラチャラした男が二人。

「……………何です?」

「オネーサン一人でしょ?よかつたら俺達と一緒に遊ばない?」

「いや、でも私……………」

「いいからいいから!」

彼等が、言葉の身体目的である事は目に見えていた。

それを差し置いても、嫌がる反応を見せた言葉に対して無理やり連れて行こうとする様は、拓海からすれば「相手の気持ちが解らないのか」と突っ込みを入れたくなる。

そして、拓海は今回の海水浴をそんなよくあるエロ同人誌のようにしてやるつもりはない。

ので。

「ふんっ!」

「あぎっ?!」

そのチャラ男の向こう脛を、拓海は思いっきり蹴飛ばしてやった。弁慶の泣き所と言うだけあり、チャラ男は声にならない悲鳴をあげる。

「た、たつくん!」

「いでっ……………な、何すんだこのガキッ!」

「言姉えが困ってるの見て解らないの?あんだ」

「てめえ……………」

流石に（外見だけは）子供を相手に、チャラ男達は強気には出れないようだ。

この手の連中はこうでもしないと言う事はきかない。

拓海が前世にて、接客業のバイトの最中にマナーの悪い客に因縁をつけられた事を思い出しているの判断である。

「ん?何だそのにーちゃん達」

「えっ?まさかナンパ?!実物初めて見た……………」

そこに、こちらの異変に気付いたセントとアリサが戻ってくる。

そこで言葉は、ようやく口を開いた。

「……………私、この子達の子守りで来てるんです、ですから、そういう事は他の方を当たってもらおうと……………」

ここまでされてしまうと、完全にチャラ男二名は悪者である。周りを見ても、僕の海水浴客からの痛い視線が突き刺さった。

「……………チッ！」

故に、チャラ男二人はバツの悪そうに舌打ちをした後、ムスツとした顔のまま去っていった。

弱い子供の立場を利用するのは気が引けし、卑怯にも思えた。

が、ナンパ男から言葉を守ったという結果は、拓海に胸がすく気持ちを与えた。

「チッ！何なんだよあのガキ！」

「いい所だったのにな、まさか子連れとは……………」

東京の方から来ていた大学生の二人組……………さっきのナンパ男達は、自分達の「狩り」が失敗に終わった事を愚痴りながら、ビーチを歩いていた。

「帰りの電車もあるし、そろそろ切り上げようぜ」

「クソッ！あの牛みてーな巨乳にぶっかけてやりたかった……………」

逃がした魚はなんとやらか。

彼等は、その「ガキ」が、その「牛みてーな巨乳」を一人占めして居る事も知らず、ぶつくさと帰ろうとする。

「……………ん？」

その時、彼等の足元が急に暗くなった。

雲でもかかったのか？と思ったが、同時に何か、生臭い匂いが漂ってくる。

そして、何者かの視線を感じて二人が振り向くと、そこには……………。

「うわああああああっ！！」

ビーチに、二人の悲鳴が響き渡った。

「うわあああああつ!!」

その悲鳴は、拓海達がいる場所にまで聞こえてきた。

何が起こったのか?と、拓海達は勿論、その場にいた海水浴客達も、声の方向へ顔をやる。

そこには。

「い、イカだアーツツ!!」

客の一人が叫んだ。

そう、そこに居たのはイカ。

海に住む、タコと双壁を成す軟体動物のイカ。

問題はその大きさである。

大きさは10m程もあり、おまけに頭を立てて浜辺を歩いて。

………つまる所、絵本やアニメで見えるような、触手を足にしたあのスタイルで上陸してきているのだ。

何のギャグだ?と思うだろう。

だが、この世界線の海鳴では、それがギャグでも何でもない自然災害………怪獣の一種として存在しているのだ。

「あれは………ゲゾラ!」

「ああ、普通より小さいけど、あれはゲゾラ!」

アリサが名を叫び、セントが解説した通り、あのイカの怪物は「ゲゾラ」と呼ばれる怪獣だ。

だが、通常のゲゾラが30mまで成長するのに対して、あの個体は10mほどしかない。

成長途中の若い個体なのだろうか。

「ちっ、ちべたいいい!!」

「寒いよオオオ!!」

だが、それでも驚異である事には変わらない。

ゲゾラの触手に捕まったあのチャラ男達は、ゲゾラの低すぎる体温に凍えている。

ポギユウツ!ポギユアツ!!

視線の先の海水浴客達を見つけたゲゾラは、新しい餌を見つけたかのように、うじゅりうじゅりと向かってきた。

「逃げろオーツ！」

「助けてくれエ!!」

迫るゲゾラに対して、人々は逃げる事しか出来ない。

当然だ、ただの一般市民である彼等には、小さいとはいえ怪獣であるゲゾラに立ち向かう手段がない。

……例外である、彼等を除いて。

「ムカつく奴等だけど、助けないワケにはいかない！」

「うっし、行くぜアリサ！拓海！」

「言葉さんは下がってて！」

「え、ええ……」

迫るゲゾラに対して、拓海とセント、そしてアリサが立ち塞がる。

海水浴客達は逃げるのに夢中で、チャラ男二人は寒さに凍え、注目する者が居ない。

今がチャンスだ。

「フレイムアイズ！」

『OK my master!』

「マグバスター！」

『Yes sir!』

「セットアアーツプ！」

光に包まれ、アリサとセントが変わる。

アリサの着ていた水着が弾けるように消滅し、その上から新たな衣服……バリアジャケットが生成される。

アリサのそれは、ピンクを基調とした、どこかなのはのそれと共通性を感じさせるバリアジャケット。

カードの形態を取っていたデバイス・フレイムアイズは、剣の姿に変わる。

続いて、セント。

ドックタグ型のデバイス「マグバスター」が、ヘッドギアの姿を取り、セントの頭部を覆う。

そして、一般的な武装局員のそれと同じバリアジャケットが展開さ

れた。

後、その上から更に、緑色の装甲が纏われる。

最後に、背中に現れた追加装備……「マグナランチャー」を背負い、変身が完了する。

ゲーム「地球防衛軍」に登場する兵科の一つ「フェンサー」があるが、あれに近い姿だ。

方や、炎の剣を振るう魔法剣士。

此方、破壊の砲を備えた人間戦車。

魔法と科学。

なんとも対象的な、二人の魔導師がビーチに降り立った。

そして、拓海も。

『ご唱和ください！我の名をッ！』

ストレイジが叫ぶ。

そして。

「ストレイジ！セー！ツットアー！ツップ!!」

気合いを入れて叫ぶ。

ストレイジを巻いた腕を上空に突き上げて。

瞬間、ミッド式魔法の魔方陣が広がり、光が拓海の身体を包む。

変身が始まった。

光の中で拓海の着ていた服は、黒いインナーシャツへ。

ズボンも、半ズボンへと変異し、靴は装甲のついた仕様に。

そして、なのはのそれに似た上着を感い、バリアジャケットの展開が終了する。

次は、ストレイジだ。

ストレイジは光に包まれ、その姿を大きく変質させる。

取っ手を中心に、六角形を上を薄く引き伸ばし、先端に穴を開けた二枚の刃がつき、そこに宝石が埋め込まれたナギナタのような近接武器形態。

そして左腕にも装備が現れる。

攻撃から身を守るディバインブロッカーだ。

その、拓海の9歳の身体からすると大きめの盾が、ストレイジを



握った手と逆の方に握られる。

最後に、ジャミングゴーグルが拓海の目を覆い、変身が完了した。

ポギユウツ！ポギユアツ！！

「来い！イカの化物！」

「焼きスルメにしてやるわ！」

ビーチに降り立つ、三人の魔導師。

敵は、海の魔物ゲゾラ。

今、ビーチの平和を守る為の、戦いが始まろうとしていた。

### 第3話

「喰らえエッ！シユートキャノン!!」

ドウウツ!!

セントの背中の中のマグナランチャーから、魔力の砲弾「シユートキャノン」が放たれる。

これはシユートバレットの応用であり、ロケットランチャー並の威力を持つ強力な射撃魔法だ。

ポギユアアアツ!?

それはゲゾラの頭部に命中し、ゲゾラは甲高い悲鳴を挙げた。

「はあっ!!」

そこにアリサが飛び上がる。

構えたフレイムアイズが、炎に包まれる。

……リリカルなのはの世界においては、魔力を他の物質や現象……つまりは属性攻撃に変換する資質を持つ魔導士が何人か登場する。

「魔力変換資質」と呼ばれる特殊体質だ。

例を挙げると、フェイトは魔力を電気に変換させて攻撃に用いている。

そしてアリサの場合は、見ての通り「炎」だ。

炎に包まれたフレイムアイズを構え、アリサはゲゾラへと突撃する。

「フレイムスラァーッッシュ!!」

ずばあっ!

炎を纏った剣の一撃「フレイムスラッシュ」が、チャラ男二人に巻き付いていたゲゾラの触手を叩き斬る。

……その様を見ていた拓海は、

昔、アリサと同じ声帯を持った、炎と剣を操るヒロインが居たなあ、と思い出していた。

最も、その作品は見えていないので詳しくは語れないのだが。

「さ、早く逃げなさい！」

「ひいいい！」

「お助けええ!!」

解放されたチャラ男達は、一目散に逃げてゆく。

これで、ゲゾラを守る人質は無くなった。

と、思った次の瞬間。

「へっ?」

……アリサが犯したミスは、ただ一つ。

自分が敵前に居るというのに、歩を止めてしまった。

それだけだ。

「きゃああっ!!」

「アリサー！」

アリサが、ゲゾラの触手に捕まってしまう。

再び、ゲゾラは盾にする人質を手にいれた、という訳だ。

……そう、なのだ。

「なっ、やあっ!や、やめなさいよお！」

ゲゾラの触手が、アリサの身体を舐め回すように巻き付く。

うじゅるうじゅると音を立てて、アリサの敏感な所を刺激している。

………なんと言うか、その手のエロマンガかエロゲーに出てきそうな絵面である。

だが、拓海の知る限りではゲゾラの繁殖は異性のゲゾラとの交尾で行われる。

人間であるアリサの身体をまさぐっても、ゲゾラにとって何もいい事などない。

ハズ、なのだ。

「………そういやこれ深夜アニメだっけ」

と、拓海が漏らした。

そうだ、この世界………というか「魔法少女リリカルなのは」というアニメは、深夜アニメ。

「進撃」や「鬼滅」のある今と違い、見ている人口も少なく、ターゲット

トも限定的。

規制も緩く、こんなシーンがあるのも日常茶飯事だった。

「どうでもいいから早く助けなさいよおおお!!」

「あーお、おうっ!!」

そんな事を考えていると、アリサからお叱りを食らった。

そうだ、まずはアリサを助けなければ。

「よし、行くぞストレイジ!!」

『合点承知の介!』

ストレイジを構え、ゲゾラに迫る拓海。

アリサのフレイムアイズのような「切り落とし」が出来る程の技能はなくとも、叩き落とすぐらいは出来るハズだ。

そう考え、ストレイジの魔力弾発射口をゲゾラの触手に向ける。

「シュートバレット……」

そしてシュートバレットを放とうとした、次の瞬間。

「むあとうえええいっ!!」

「うわっ!」

突如拓海を蹴り飛ばす、謎の乱入者。

蹴飛ばされた拓海は、ビーチに激突して砂埃を立てる。

「な、なんだ……ッ!」

一体何が起こったのか。

誰が自分を蹴飛ばしたのか。

そんな、ちよつとした混乱の中、拓海が上空を見上げる。

するとそこには、拓海を蹴飛ばした張本人が居た。

「ジェラシーマスク、参上!」

親切に名乗ってくれた、この「ジェラシーマスク」という乱入者。

ムキムキに鍛えられた身体にびっちりしたコスチュームを纏い、マントを羽織った姿は、まるで往年のアメコミヒーローのよう。

ただ、顔を覆う覆面レスラーのような仮面は、額の部分に「妬」と書いてある。

それによく見れば、コスチュームもどこか安っぽいと言うか、チープに見える。

正統派アメコミヒーローと言うよりは、馬鹿にする目的のパロディで登場するギャグキャラ。

と言った感じだ。

そんな乱入者に対して、拓海は。

「お前、まさか転生者か!」

そうだろうな、と思いつつ聞いてみた。  
すると。

「その通り!」

「やっぱりな」

予想はできていたが、このジェラシーマスクとやらは、案の定転生者らしい。

当然だ。

こんな個性の塊がリリカルなのはに居てたまるか。

「……………もう一つ聞くけど、このゲゾラにビーチを襲わせたのもあんたか?」

「その通り!!」

「やっぱりかい!」

そして、案の定というか、このゲゾラ襲撃の黒幕もこのジェラシーマスクらしい。

ジェラシーマスクもジェラシーマスクで、とぼけも誤魔化しもしない辺り、よく出来た展開である。

「じゃあ何でこんな事するんだッ!? 怪獣にビーチを襲わせるなんて、何考えてんだよ!!」

拓海は、そんなジェラシーマスクを糾弾する。

ゲゾラは、外見こそイカそのものであるが、立派な怪獣だ。  
肉食でもあり、触れた相手を凍死させる程の体温も持つ。

そんなゲゾラをビーチで暴れさせるなど、止める者が居なければ確実に死人が出る。

そんな事を堂々とやれる根性に、拓海は怒りを燃やした。

「何を言うか、こうなったのは全て貴様のせいだ高尾拓海」

「はあ?!」

ジェラシーマスクの返答に、拓海は思わず「はあ?!」と漏らしてしまふ。

当然だ。

自分のせいでビーチがゲゾラに襲われるなど、意味が解らない。

「このゲゾラは、貴様を殺す為に用意したのだからな!」

「何だと?!」

「貴様は許されていい存在じゃない!それが解らんのか!!」

ますます、意味が解らない。

セントや、ゲゾラに捕まっているアリサも「何言ってるんだこいつ」と言いたそうに見ている。

「罪の意識が無いようだから教えてやる……………」

困惑している拓海に対して、ジェラシーマスクはビシツと指を指して言い放つ。

「貴様が誰か一人を選ばず、何人も美少女を侍らせている事!それが貴様の罪だアツ!!」

圧を込めて放たれたその指摘に、思わず拓海は口を瞑ってしまふ。何を言ってるんだお前はと言いたかったのだが、ジェラシーマスクの圧に押され、何も言い返せない。

「大体貴様は何だ!貴様にはモテる説得力が無すぎる!成績も並!運動も並!漢ですらない!!取り柄は優しいだけだ?!ふざけるなアホタレが!!少しはケンシロウやルパン三世を見習ったらどうだ!へタレ野郎が!!」

……………さて、これを見ている令和育ちのヤングメン達には理解できないだろう。

書いている作者もそうだ。

だが、ここは醜き平成の、深夜アニメ戦国時代たる2007年。

今のなろう産ファンタジー物がある立場に学園ハーレム物全般があったと考えれば、分かりやすいだろうか。

ジェラシーマスクが言っている事も、よくよく見れば個人の感想ではないのだが、これが全体の正論として扱われていたのだ。

作者やアニメスタツフに対して「お前は惨めな人生だからこんな物

を思い付くのだろう」と、人格否定と共に飛ばされていたのだ。

「それは……………その……………」

前世の、令和の空気を知っている拓海であつたが、ここまで罵声を飛ばされていると、罪悪感が沸いてくる。

言われてみれば、そうだ。

考えてみれば、拓海の身の回りには美少女が多い。

アリサやすすか、それになのはともよくつるんでいる。

この先原作崩壊が起こる事がなければ、将来そこにフェイトも加わる。

家には、言葉が待っているし、時空管理局と協力している事から、リンドイやエイミイとも接点が出来ている。

対して、自分はもうどうか。

ジェラシーマスクの言う通り、勉強もスポーツも並。

魔法の才能こそあるが、現時点でのリリカルなのは本編の魔導士達と比較すると最弱のBランク。

そもそも、前世は惨めの極みである介護用子供部屋おじさん。

そんな自分が、何故彼女達と釣り合うと言えるのか。

『ま、マスター?!どうしたでございませう?!』

ストレイジが異変を感じ取った時には、拓海はストレイジを握る手を下ろし、構えを解いてしまっていた。

「俺は……………皆の側にいる資格は……………」

……………これは、あのジェラシーマスクの能力。

転生者特典による物。

特典の名は「はい論破」。

催眠術の一種であり、自分の発言に説得力を持たせるといふ、かなり厄介な物だ。

これをやられると、言いがかりレベルの物ですら、完璧な正論に聞こえてしまう。

加えて、自己肯定感を万力で潰されるような前世を送った拓海だ。

ジェラシーマスクが「お前はクズだ」と言えば、それが真実に思えてしまうだろう。

『マスター！しっかりするでございませうよ！マスター！！』  
ストレイジが叫ぶも、拓海には届かない。  
このまま、拓海のメンタルが闇に落ちるかと思われた。  
だが。



## 第4話

ジエラシーマスクの転生者特典により、メンタル面から追い込まれる拓海。

「解ったか?!お前は生きてちゃいけない人間なんだよ!この世に産まれてきた事事態が……………」

最後の一押しとばかりに、ジエラシーマスクは「お前は死ぬべきだ」と吐き捨てようとした。

今までもそうだ、そうやって他人を好きなように利用してきた。

だが、ここでジエラシーマスクは、この万能と思われる能力の弱点を知る事となる。

「それって嫉妬じゃん」

最後の一言を突き刺そうとした直前、ジエラシーマスクの口撃を遮る者がいた。

セントである。

「な……………?」

「だからさ、それってただのお前の嫉妬じゃねーか、なんでそんなモンで他人の生き死にまで決められなくちゃならねーんだ?」

「な……………な……………?!」

あからさまに同様を見せるジエラシーマスク。

セントの流れるような論破を受けて、同時に拓海の方も調子を取り戻しつつあった。

「そうだ……………そう!そうだよ!」

『マスター!』

そうだ。

よくよく考えれば、ジエラシーマスクの言っている事は個人的な嫉妬でしかない。

モテる説得力の話も、架空の創作物に対してならまだしも、現実に

ここにいる拓海に対して言われても「それ貴方の感想ですよね？」と  
しかならない。

そもそも、他人をいじめるような屑ほど女子にモテるといふ事を前  
世で嫌と言う程味わった拓海からすれば、

ジェラシーマスクの言う「モテる説得力」というのがいかにバカげ  
た話かがよく解る。

「……………あの、まるで拓海がハーレムみたいに言うけどさ」

続いて、ゲゾラに拘束されたままのアリサも参加してきた。

恐る恐る、と言った感じで振り替えるジェラシーマスク。

「なのははともかく、私とすずかには婚約者いるわよ?」

瞬間、訪れる沈黙。

「……………えっ?! そうだったの!?!」

「話してなかったっけ?」

「初耳だよ!!」

拓海もセントも知らなかったが、アリサとすずかには婚約者が居  
る。

バブルがとうの昔に弾け飛び、不景気に向けて転がり落ちている最  
中の、2004年の日本。

その日本で、本人ですら把握し切れない程の莫大な財産と、犬猫数  
十匹を飼える程のお屋敷を構えているバニングス家と鈴村家だ。

そのご令嬢となれば、当然許嫁ぐらい居る。

「秘密にするよう言われてるけど、少なくとも私の相手はいい人よ  
?この人となら結婚していいって思える位にね」

そのアリサの発言には、「だから横恋幕は無駄の極みだし、少なくとも  
も私は拓海のハーレム要因ではないぞ」という意味も含まれていた。

そして、それを聞かされたジェラシーマスクはと言うと。

「う……………嘘だあああ!!」

発狂。

直視したくない現実を見せられたかのように、頭を抱えて喚き散ら

す。

………ジェラシーマスクの転生者特典・はい論破。

一見、相手を意のままに操れる催眠術めいたこの能力には、弱点が存在する。

一つは、つかう対象を一人にし縛れない事。

もう一つは、相手がそれを「ただの言いがかり」と理解した瞬間、効果が無くなる事だ。

そこにセントやアリサのような、冷静な第三者が居た為に、ジェラシーマスクの作戦は破綻してしまったのだ。

「そんな………嘘だ………アリサが中古だったなんて!!」

「いや、まだ処女だけど私………」

「婚約者がいる時点で貫通済みみたいなモンだろ!!」

「なんて暴論?!」

………こいつも転生者の一人だと考えると、おそらくアリサを狙っていたのだろう。

そしてアリサに婚約者がいた………つまり、既に男が居たと知れた途端の発狂っぷりを見るに、なんとなく奴の転生前の世代が解る気がした。

『今がチャンスでございませすよ!マスター!!』

「ああ!」

そして、逆転の一步を踏み出すなら今がチャンス。

体勢を立て直した拓海は、改めてストレイジを構え、ジェラシーマスクに突っ込む。

「このお!」

「き、貴様ああ?!」

空中でぶつかり合う、拓海とジェラシーマスク。

両者は戦いながら、海の方へと離れてゆく。

そして、こちらも。

「………いつまで巻きついてんのよ、スケベイカ!」  
ポギユツ!?

アリサの身体から、魔力で形成された炎が広がる。

魔力のオーラが広がり、まるでアリサ自身が赤く光っているように見える。

そして。

「アリサダイナマイトお!!!」

瞬間、広がる爆炎。

アリサの持つ魔力から変換された炎が、アリサを中心に広がった。

これは、アリサが魔法の特訓の中で産み出したオリジナル魔法「アリサダイナマイト」。

全身から魔力の炎を吹き放ち、周囲の敵を炎で包む攻撃魔法。

アリサの魔力の半分を使う大技だが、ゲゾラの拘束から逃れるにはこれしかなかったのだ。

ポギイイイイ?!

そして、本来ゲゾラが登場する作品である「ゲゾラ ガニメ カメーバ 決戦! 南海の大怪獣」の劇中において、ゲゾラの弱点は炎だった。

それを間近で放たれたゲゾラのダメージは、言う間でもない。

ポギイイイイイ!ポギイイイイイ!

顔面に大火傷を負い、のたうち回るゲゾラ。

その前に、焼き切られてボトボトと落下する触手と共に落ちてくるアリサ。

「あぶねっ!」

咄嗟に、セントが動いた。

脚部のアーマーに内蔵されたホバー機能を使い、砂塵を巻き上げて疾走するセント。

重装備であるセントは、見た目の通り鈍重だ。

それを補う為に、バリアジャケットにホバー機能が備わっているのだ。

こんな所も、フエンサーそっくりである。

「よっとー！」

「わっとー！」

落下してきたアリサを、セントが受け止める。  
そして、のたうち回るゲゾラから距離を取る。

そして、戦いは空の方でも繰り広げられていた。

「うおおおっ!!」

「ぐうううっ!!」

空中で、拓海のアストレイジと、ジェラシーマスクの拳がぶつかり合う。

当初ジェラシーマスクは、拓海のことを甘く見ていた。

魔導師ランクもBと、大した事のない奴だと思っていた。

まるで、彼の嫌悪するラブコメ漫画の主人公のような、優しいだけ  
が取り柄のヘタレ野郎だと。

だが、実際はどうだ？

「だりやつー!だりやつー!たあああっ!!」

「ぐうううっ!!」

拓海は、想像以上だった。

少なくともAランク並の力を持つジェラシーマスクを、勢いで圧倒  
している。

「なんだッ!?何故お前はこんなに強いんだッ!」

「知りたきや教えてやるよー!」

戸惑うジェラシーマスクに向けて、拓海は大きくアストレイジを振り  
かぶる。

まるで、野球のバットのよう。

………そもそも、ジェラシーマスクの言う「優しいだけだが取り柄  
のヘタレ野郎」だが、

その多くは、悪意を持った視聴者によって曲解され広められた風評  
に過ぎず、ちゃんと作品を見ればきちんと理由付けは成されているの  
がほとんどだ。

当時は、その作品の世界観も作風もガン無視して、某宇宙海賊や愛がテーマの暗殺拳使いのレベルでやつと「モテる説得力のある男」と認められるという、アホか?と言いたくなるような空気がまかり通っていた。

「日々の努力と鍛練の結果だああああ!!!」

そんなレベルにならなくとも、主人公は務まるのだ。

Bランクの立場に満足せず、日々努力している拓海のように。

「がふああっ!!」

カ、キ、イ、ンツ!!

野球選手がホームランを決めるがごとく、拓海はストレイジでジェラシーマスクをかつ飛ばした。

そしてかつ飛ばされたジェラシーマスクは。

「ぐえっ!」

ポギユアツ!?

のたうち回っていたゲゾラに激突。

二人仲良く……………一人と一頭だが……………砂浜にダウンした。

「トドメだ!ストレイジ!」

『リリカル任せる!』

トドメを刺すなら今だ。

拓海はストレイジの魔力発射口の切っ先を、ゲゾラとジェラシーマスクに向ける。

瞬間、拓海の足元にミッド式の魔方陣が展開。

ストレイジの魔力発射口に魔力が充填される。

そう、それは拓海の魔法の中でも最強の物。

かの高町なのはの主砲たる、砲撃魔法の代名詞。その名は。

「ダイバインツ……………バスタアアー!!」

ドウオツツ!!

と、放たれる、青白い魔力の光。

「デイバインバスター」。

それは、青白い魔力の奔流となり、ゲゾラとジェラシーマスクに直撃する。

ドウオオオオオッ!!

大爆発。

命中したデイバインバスターにより大爆発が広がり、ビーチの砂を巻き上げた。

まるで、バスターアンカーか何かが炸裂したかのような光景が、海鳴ビーチに広がった。

「……………これ、本当に死んでないのよね」

「物理破壊設定でなけりや、な」

これだけの爆発ではあるが、非殺傷設定故にジェラシーマスクもゲゾラも死んでいないのだから不思議である。

まあその代わり「死ぬほど痛い」らしいのだが……………。

ビーチを襲い、拓海達に撃退されたジェラシーマスク。

非殺傷設定とはいえデイバインバスターの直撃を受けたというのに、逃げられるだけの体力は残っていたらしい。

そのまま行方を眩ませ、ゲゾラも海へと逃げ帰っていった。

ジェラシーマスクの搜索を管理局に任せ、帰路についた拓海達はどうと。

「だるいいい……………」

「頭がぐらぐらす……………」

帰りの電車で揺られる拓海とアリサは、大技で魔力の多くを消費してしまい、完全に疲れきっていた。

それぞれセントと言葉にもたれかかり、脱力していた。

「しっかりしろよーアリサ、駅についたら歩きだぞ?」

「わかってるわよお……………」

子供達を微笑ましそうに見守る言葉。

だが、そんな言葉の中に、ある引つ掛かりが生まれていた。

「(……………私、ずっとたつくん達に助けられてばかりです)」

そう、本来はお姉さんである自分が率先して子供達を守らなければならぬのに、何も出来ていない。

鎌瀬に捕まった時も、今回も。

「(……………私も、戦えるだけの力が欲しい……………)」

言葉の心に、ある決意が生まれた。

それが、これから始まる戦いに関わってくる事は、まだ誰も知らない……………。

#### 【転生者名鑑】

・泉龍之介（いずみ・りゅうのすけ）

通称「プロフェツサイズミ」。

前世はサラリーマンで、保険金目当てで家族に殺された後に、幼いクロノに買い与えられたオモチャのロボットに転生した。

その後、なんやかんやあって今の「泉こなた」に似た姿になり、転生者特典である天才的な頭脳を活かし、時空管理局の技術長官に収まった。

頭脳に引つ張られたのか、どこぞのデロリアンの開発者のような性格。

・転生者特典：天才的な頭脳

読んで時のごとく、天才的な発想と知識を生み出す脳。

これによりイズミは自分の身体に改造を施したり、デバイスを初めとする様々なガジェットを発明する。



## 第2章 「イタリア料理を食べに行こう」 第5話

拓海の今までの記憶で、二度目となる小学4年生の夏休みは、あつという間に過ぎた。

その間も、家で皆と集まってゲームをしたり、アリサ主催のパジャマパーティーをしたりと、楽しい時を過ごした。

……勿論、その中には言葉とのあれそれも含まれているが、詳しくは割愛する。

そして始まった第二学期。

運動会イベントが近づいた、ある日の放課後……。

「……………この所増えたな」

自身の携帯電話を前に、拓海は呟く。

……私立聖祥大附属小学校はお嬢様・お坊っちやま学校の為、他の小学校より進んでおり、生徒の携帯電話の持ち込みが許されるのだ！

さて、そんな携帯電話で拓海が見ていたのは……………ニユースサイト。

海外のニユースを専門に扱うサイトだ。

そこには。

……………中国山中にてチタノザウルス出現。

……………シベリアにてギガスの目撃情報。

……………ウエスター島の地下よりジャイガー出現。

……………メキシコ山中にて休眠中のガバラ、活動活性化か。

……………オーストラリア沿岸にてガマクジラ出現。

……………ジーダス、南アメリカの村を襲撃。

拓海のあるこの世界は、元のリリカルなのはと違い、本来は登場しない様々な作品の「怪獣」が、世界各地に生息している。

だが、その殆んどが休眠、もしくは仮死状態で眠っており、人々は彼らを起こさないように気をつけながら、今日まで生きてきた。だが。

拓海達がビーチでジェラシーマスクと戦ったあの日を境に、眠っていた怪獣達が活性化している。

これは一体、どういう事なのだろうか？

まさか、ジェラシーマスクが怪獣達を目覚めさせているのか？

と、考えたが、これは無いだろう。

転生者特典は、基本的に一人一つ。

飛行魔法等は独学で覚えたとして、奴の転生者特典は「はい論破」。流石に、この能力で怪獣を操れるとは思えない。

それに、ジェラシーマスクは以前より管理局からマークされていたのだが、なんとというか「ちやちい奴」らしい。

地球の怪獣達を目覚めさせるような、ビッグな事は出来ない。

以上の事から、ジェラシーマスクが異変の黒幕という事は無いだろう。

なら、一体何故怪獣が活性化しているのか？

場合によっては自分や言葉達にも被害が及びえる問題だけに、拓海はいつになく真剣に考えていた。

そこに。

「何難しい顔してんだよ」

ちよっかいをかけてきたのは、セントだ。

「……………ふあゝあ」

何故か、眠そうにしながら。

「この所いつも眠そうだよな、どったの？」

「最近ゲームにハマっちゃってき、ついつい徹夜しちゃうんだよ」

仮にもお坊っちゃま学校に通っているのに、それでいいのか。心中でそうツツコミを入れた拓海の、前の席にセントは座る。

そして、椅子を動かして拓海と向かい合った。

「でね、拓海に相談があるんだよ」

「恋のお悩みなら聞かないぞ、専門外だからな」

「大丈夫大丈夫、もつと簡単な相談よ」

セントが、拓海にしようとしていた相談。

それは。

「時に拓海よ」

「何さ」

「子供だけで高級料理食べに行くって、憧れない？」

「はい？」

何を言ってるんだお前は。

思わず、心と身体で同じ感想が出てしまう。

「いやさ、だって憧れるだろ?!なんつーかさ、スリル? って言うの?

そうした感じのアレをよ!」

興奮気味で語るセントを見るに、ようはスリルを味わいたいらしい。

確かに、子供だけで高級料理店に入るといのはスリルを感じる。

その感情は拓海にもまあ解る。

「……………つまり、一緒に高級料理店とやらに行って、スリルを味わって欲しいと?」

「イグザクトリィー!」

その通り!と満面な笑みで答えるセントに対して、ちよつとイラつと来たりしたが、胸の奥に引つ込める。

……………まあ、同じスリルを味わいたいという理由で、万引き等の犯罪に手を染めるパターンと比べれば遥かに健全な選択である。

が、拓海の答えは。

「だが、断る」

NOであった。

「エエーッ!?何でだよ!スリルを味わいたくねーのかスリルをツ!

「あのなあ、俺は食事は安心して行こうように決めてんの、スリルは求めてないの」

すがり付くセントを、拓海はそうあしらう。

……………そも、拓海にとってスリルの伴う食事というのは、忌まわし

き前世で嫌という程味わった物だ。

そう、暗黒の中学生時代。

いじめの渦中に居た拓海にとって、学校で食事をするという事はサバイバルも同然だった。

加害者のDQN共に見つかれば、唯一の食料である弁当やパンは取り上げられ、捨てられるか食べられるかして、拓海はその後を空腹で過ごす事となる。

だから、食事を邪魔されない場所を、必死に探す毎日だった。便所、ごみ捨て場、倉庫。

まるで某メタルなギアでソリッドなスネークにでもなったつもりで、息を殺して食事を取っていた。

そんな拓海にとって、転生して手に入れた「安心して食事が行える学園生活」こそが是であり、

スリルを味わいながらの食事など、もつての他である。

「そーいう訳だから、悪いが他を当たってくれ」

そう言つて、拓海はその場を去ろうとした。すると。

「……………へっ、拓海はいいよなー……………家に帰れば美人で乳のたかお姉ちゃんの作った手料理が待ってるんだからよー……………」

教室を出ようとした拓海の背後から、セントの独り言が聞こえてくる。

いや、独り言と言うよりは呪詛のそれだ。

鬱々とした、どんよりとしたオーラを全身から放っている。

「いいもんねえー……………どーせ俺は百合に敗北するような負け犬男だもんねえー……………一人寂しくスリルを味わうとしますよちくしよー……………」

拓海は、そこまで友情に熱いというか、どこぞのキン肉の星の王子たる正義超人のような男ではない。

人並みの善意と、人並みの正義感があるだけだ。

だから、セントの誘いにも上の通りにNOを突きつけた。

だが、ここまでされてしまうと話は別だ。

「……………ん、もう！解ったよ！付き合うよ、そのスリルってやつに  
！」  
最終的に折れたのは拓海の方であった。

## 第6話

海鳴の一角。

一等地、そんな言葉が似合うこの場所を、拓海とセントは歩いている。

セントは、あらかじめ向かう高級料理店を決めていた。

それは、この閑静な住宅街に隠れるように建っているイタリア料理店。

いわゆる「隠れ家レストラン」というやつだ。

「そーいや、セント、お金はあんのか？高級料理店だぞ」

「へへっ、こう見えて結構お小遣い貰ってるんだぜ、俺」

親の金で威張るなど言いたいが、小学生相手には酷だなど思い、拓海は出かかったツツコミを引っ込めた。

セントはあくまで庶民の出ではあるが、この小遣いの話や、そもそも聖小の学費を考えると、庶民は庶民でもまあまあの上流階級なのだろう。

アリサやすずかが桁違いなだけで、彼も拓海の基準から言えば金持ちなのだ。

「おっ、ここだここだ」

そんな、他人の家の経済事情について考えていたら、お目当ての高級料理店についたようだ。

白い屋根に白い壁。

清楚さを感じさせる純白の家が、そこにあった。

玄関の前に立て掛けた看板には「スイートシユリンプ」と書いてある。

店の名前なのだろう。

……直訳すると「甘エビ」になるのだが、気にしてはいけない。

「ん……………」

ふと見ると、看板の店名の下に何かが書いてある。

拓海が見てみると、そこには。

「今日のメニューはお客様次第……なんだ？これ」  
「これはどういう事だろうか？」

店名以上に引つ掛かるが、全てはこの扉の向こうを見れば解る事。

「は、入るぞ………」

「お、おう………」

扉に手をかけるセントと、後ろで見守る拓海。

それはまるで、風俗店に初めて足を踏み入れる童貞がごとし。

意を決し、セントがドアを開いた。

カランカラン。

ドアについたベルが鳴り、来店を知らせる。

「……………おお」

「これはこれは……………」

店に入った彼等が見たのは、お洒落な店内だ。

海外の著名なデザイナーに頼んで作らせたような、清楚感のある壁

紙や部屋の作り。

そして並んだ白いテーブルと椅子。

豊かな時代……特に80〜90年代を生きた人が想像する「お洒

落なカフェ」を体現したような、そんな場所だ。

外食と言えばファーストフードかファミレスぐらいしか知らない

拓海とセントだったが為に、新鮮な気持ちになった。

「いらっしやいませ」

店の高級感に見とれていると、店の奥から声が飛んできた。

古い特撮映画に出てくるような、カタコトの日本語を話す外国人の

ような口調だ。

そこに現れたのは、一人の外国人の男。

見た感じ、フランス人だろうか？スラツとした長身を、白いコック

のコスチュームに包んだ、一目で料理人と解る風貌の男。

「えっと、あの……………」

冷やかしだと思われて追い出されても気が悪い。

拓海は「自分達は客としてここに来た」と、その外国人の男に伝え

ようとした。

だが。

「どうぞ、此方へ」

「えっ？」

外国人の男は、どう見ても子供である二人を追い出す事なく、席へと案内する。

「……………いいんですか？」

「この店でハ、お代金さえ払って頂ければ、誰にでも料理を提供します」

「どうやら、お客として扱ってくれるようだ。」

拓海とセントは安心し、案内されるままに店内にある席に腰かけた。

「申し遅れました、私は「トニー・クローバー」と言いマス、この店の店長兼コックをやらせて貰ってマス」

遅れて、外国人の男……………トニー・クローバーが名乗った。

「私は故郷フランスを初メ、様々な国の料理を研究シ、自らの料理に組み込みマシタ、そしてこの海鳴が自分の腕を振るうのに最高の場所だと思イ、ここにレストランを構えたのデス」

「ほーっ、それは期待出来そうだなー！」

なるほど、トニー氏の言う通り、海鳴は自然も多く、山も海もある。なるほど、食材には困らず、彼が料理の腕を振るうには十分という訳だ。

「それじゃ、早速メニューを見たいのですが……………」

と、拓海がメニューを頼む。

テーブルの上には何も乗っておらず、トニーが持ってくるのだと考えたからだ。

だが、それに対するトニーの返答は。

「無いヨ」

「……………はい？」

「そんなモノ、ウチには無いヨ」

何を言っているのだ？と拓海は固まった。

セントも、戸惑うような表情を見せている。



レストランなのに、メニューが無い。  
それでは、料理が頼めない。

これは一体どういう事なのだろうか。

拓海とセントが宇宙猫のような状態になってるのを見かねてか、トニーが説明する。

「この店デハ、お客様にお出しする料理ハ、私がお客様を見て決めて  
いるのデス」

「えつとつまり……シェフの気まぐれ、つてやつ？」

「イエス、もつと言うとミステリーツアー的なアレデス」

それはレストランとしてどうなんだ？と思ったが、ここは普通のレストランではなく、一等地を隠れ蓑にするように佇む「隠れ家レストラン」だ。

普通のレストランとは、勝手が違うのだろう。

「ご安心ヲ！お値段はどんな料理でも3500円以内ですノデ」

「3500……ギリギリ払えるな！」

「デハ、私はこれデ……」

お値段も問題なしという事で、トニーは拓海達のテーブルに水の  
入ったコップを置くと、調理場へと消えていった。

3500円……と言うと「高級」料理とは言えないのでは？と思  
うが、小学生である拓海達から見れば、十分な大金である。

おそらくトニーも、それを理解してサービスしつつ、社会勉強をさ  
せているのだろう。

そう思うと頭が下がる一方で、一種のしたたかさも感じる拓海なの  
だった。

「んっ……ふぁぁあ」

セントが、大きくあくびする。

昨日もまた徹夜したという事は、見て解った。

その理由が、ゲームである事も。

「……時にセントよ」

「んあ、何？」

「セントがハマってるゲームって何なんだ？」

そして拓海が気になるのは、セントを夢中にさせるゲームは、何なのだろうか？

好奇心から尋ねた拓海に、帰って来た答えは。

「ボクらの太陽、だけど」

ああそれか、と拓海は納得した。

それは拓海が前世でも遊んだゲームであり、どうやらこの世界にも存在していたらしい。

拓海も好きなゲームではあるが、システム的にも夜中にやるゲームではない。

「……………それ夜中にやっちゃダメなやつでは？」

そも、「ボクらの太陽」というゲームは、ゲームソフトについての太陽センサーで太陽光を浴びて攻略してゆくゲームだ。

まあ、夜中も遊べない事はないが、難易度は上がるだろう。確実に、どこかしらで詰む。

「んっ……………」

そんな事を話ながら、セントがコップに入れられた水を口に含む。

「……………セント？」

その途端、セントの動きがピタリと止まる。

一体どうしたのかと、拓海が声をかけると……………。

「た……………拓海……………この水……………！」

「水、水がどうかしたのか？」

「いや、ミネラルウォーターか……………こんな美味しい水、生まれて初めて飲んだッ！」

たかが水に何を言ってるのだ。

と、置いてきぼりを食らった拓海の前で、セントは語り続ける。

「なんっーか、気品に満ちた……………例えば深い森の奥に住んでるエルフのお姫様が飲む水っっーか！炎天下を何時間もさ迷った後に初めて飲む水っっーかよ!!」

そんなに美味しいのか？

と、拓海も水を少し飲んでみた。

「……………まあ、美味しいけど……………」

たしかに美味しいが、それほど騒ぐ程なのだろうか？  
と、もう一度セントの方を見てみると……………」

「……………セント?」

「うう、美味すぎて泣けてきたぜ……………」

この時点で、拓海は異変に気付いた。

今までならノリやおふぎけで説明がついたが、見ればセントは目から涙を流して泣いている。

嘘泣きで涙は出ない。

なら、これは一体どういう事なのか？

「うう……………うううっ!おろろくくん!」

「セント?!おいーちよっ……………お前眼が変だぞ?!」

異変は、更にエスカレートを見せた。

文字通りに、涙が滝のように流れ出した。

そしてセントの眼球が、まるで空気の抜けたボールのようにふにやふにやになっているのだ。

まるで、涙を吸ってふやけて・いるようだ。

明らかに普通ではない。

「落ち着いて下サイ」

「なッ!?!」

「目玉が萎むのは一時的な物デス」

見れば、そこにはトニーの姿。

すました笑顔で、料理の乗った皿を持っている。

「お前ッ!?!セントに何を飲ませやがった?!」

こいつが水に何か細工をしたのか。

拓海がトニーに飛びかかろうとした、その時である。

## 第7話

「拓海！見てくれ！」

「セント?!」

「眠気が吹っ飛んだぜー……ツツ!!」

そこには、まるでさっきまでの眠そうな様が嘘のような、さっぱりとしたセントが立っていた。

目も、ふにやふにやしておらず、元通りだ。

「10時間熟睡して目が覚めたみてーだ！バツチリの気分だぜ!!」

「おまつ………目はなんとも無いのか?!」

「ああー」

見るからにピンピンして元気そうなセントに、困惑する拓海。

あの、眼球が萎んだ現象は何だったのか？

驚いていると、トニーが解説の為に口を開く。

「そのミネラルウォーターハ、アフリカはキリマンジャロの5万年前の雪解け水で、眼球内を汚れと共に洗い流し、睡眠不足を解消してくれる水なのデス」

「………じゃあ、俺がなんとも無いのは何でだ？」

「それは貴方が、昨日ぼつちり睡眠を取っていたからデス」

先程の現象は、まさに怪奇そのものである。

だがそれは、拓海の前世を基準に考えた場合の話。

「なあ拓海、5万年前ついたら今世界中で寝てる怪獣がピンピンしてた時代劇だぜ？そんな水ぐらいあるよ」

よくよく考えてみれば、ここは「リリカルなのは」という、ごく普通に魔法という異形が間近に潜んでいる世界が母体。

その原作である「とらいあんぐるハート」には、妖怪やアンドロイドの類いが普通に登場する。

それに加えて、この世界では何万年何億年と眠っていた巨大怪獣が、世界各地に潜んでいたりもする。

飲んだだけで目が萎み、睡眠不足を解消してくれる水ぐらい、存在

しても別に可笑しくないだろう。

それも、そんな怪獣達が地上を闊歩していたであろう5万年も前となれば、尚更だ。

「それでハ、前菜をドウゾ」

「……………お、おう」

まだ少しだけ納得はいかなかったが、とりあえず拓海は椅子に戻る。

対するセントは、運ばれてくる料理を今か今かと待ち構えている。なんとも、胆の座ったヤツである。

そんな二人に、トニーが差し出した料理。

それは……………。

「……………サラダ？」

スライスされたモツツアレチーズとトマトが交互に重なり、レタスと焼いたパンが盛り付けられている。

稚拙な表現ではあるが、小学生男子であるセントと、片寄った知識しか持たない元子供部屋たる拓海には、サラダとしか認識できなかった。

まあ、サラダの一種ではあるのだが。

「こちらハ「カプレーゼ」と言うサラダデス、イタリアではみんな好んで食べテル、もつとも代表的な前菜のひとつデス」

「へえ……………」

これは拓海がネットで得た知識であるが、トマトを最初に料理に使ったのはイタリア人らしい。

なるほど、スパゲッティにピッツアと、イタリア料理と言えば大体トマトが入っている印象がある。

トマトを扱わせたら、イタリア人の横に出る者はいないとまで言われている。

それを知らずであるが、セントは、フォークでトマトを掬おうとした。

すると。

「お客様、ストップデス」

「んっ?」

トニーがストップをかけた。

「どつたの? トニーさん」

「こちらハ、トマトとモッツアレラチーズを同時に味わう料理となつておりマス」

「へえ……………」

ややこしいなと思いつつ、セントは改めて、トマトにモッツアレラチーズを乗せて、口の中に運ぶ。

……………実を言うと、セントはこの料理に期待はしていなかった。

と、言うのも、小学生男子の主食というのはあくまで肉。

嫌いでなくとも、野菜の乗ったサラダというのは、二番手以降というか、脇役という認識だったからだ。

だが、セントがトマトとモッツアレラチーズを口の中に運び、噛み締めた。

次の瞬間。

「う……………うメエー……………ツツツ!!」

セントが感激の叫びを挙げた。

ミネラルウォーターの下りから予想は出来ていた拓海も、同じようにカプレーゼを食べつつもぎよつとしていた。

「トマトがチーズを! チーズがトマトを互いに引き立てているツ! なんとというか、ハーモニーというか! 例えるなら、キラに対するアスランつつーか! クウガに対する一条さんつつーか! そんな感じだぜ!!」

「グラッツェ! お褒めいただき、光栄デス」

興奮気味のセントと、それにこやかに答えるトニー。

拓海も美味しいと感じていた。

が、ここまで騒ぐ程でもないだろうとも思っていた。

……………そして、異変は再び起きた。

「……………ん、んー、んー?」

ふとセントが、何やら服の上から肩を掻き始めた。

「どうした? セント」

「いや、なんか肩が痒いつつーか、首の辺りが熱いつつーか……？」

拓海も、服が擦れたとか汗で蒸れたとかで、服の下が痒くなる事はある。

だが、セントは様子がおかしい。

まるで服の下を虫に噛まれたかのように、ボリボリと激しく掻いているのだ。

その時、トニーがニヤリと笑い、一言。

「………お客様、上着を脱ぐ事をオススメします」

拓海が、トニーの意味深な一言に何か引つ掛かりを感じた。

と、同時にセントが着ていた上着を脱ぎ、半裸の格好で肩をボリボリと掻き始めた。

すると。

………ぱりっ

響く、痛々しい音。

「う………うわああああ?!」

「か、肩の皮が抉れた?!」

肩を掻いていたセントの手に、なんと肩の皮膚がべったりと付いているのではないか。

まるで、油粘土を引つ掻いたかのように。

「落ち着いて下サイ、それは垢です」

「垢あ?!」

騒ぐ二人に対して、冷静に告げるトニー。  
垢。

古くなった細胞が体外に剥がれ落ちる、風呂で身体を洗う事で落とせるアレである。

たしかに、引つ掻かれた肩からは出血は見られない………が、仮に垢だとしてもこれは異常である。

「お客様、もっともつと掻いて下サイ、体内の悪い細胞を削ぎ落とすのデス」

「お………お、おおお~~~~ツ?!」

そんな拓海を他所に、セントはトニーに言われた通り、ボリボリと肩を搔き続ける。

その度に垢が、まるで腐った木のように剥がれ落ちてくる。

「おいー止めろセントー・肩がえぐれてるぞッ!？」

そんなセントを、拓海は止めようとした。  
当然だ。

体外に剥がれ落ちた垢は野球のボールが作れるような量であり、拓海の目には垢所か肩の肉が抉れているようにも見える。

明らかに異常かつ、危険である。  
だが。

「肩が……………軽いッ!!」

「……………は?」

セントに、異常は無かった。

抉れているように見えた肩は元に戻り、柔軟体操のようなポーズを取っている。

「肩がバカ軽いんだよ!まるでプールの中にいるみたいだッ!ほれ、こんなポーズも取れちゃうんだぜッ!？」

そう言つて、背中では右手と左手を繋いで見せるセント。

そう言えば、最近肩がこつているみたいな事を言っていたなど、拓海は思い出していた。

おそらく、あの大量の垢は肩凝りというか、凝っている筋肉そのものだったのだろう。

それを垢として放出し、新しく筋肉と皮膚を作った。  
からくりとしては、こんな感じだろう。

「……………では、料理を続けましょうカ」  
ただ、それが異常な事は変わらない。

冷や汗を流す拓海の前で、トニーは変わらずニコニコと微笑みながら、コースの継続を宣言した。



## 第8話

トニーは垢を箒で片付けると、再び厨房の奥へと消える。そして、しばらくして。

セントが残りのカプレーゼを食べ終わると同時に、トニーが次の料理をワゴンに乗せて戻ってきた。

拓海は、途中で食べて残していた。

そりやそうだ、目の前であんな事が起きたのだ。

とても、食べる気にはなれない。

「次はパスタデス！名付けて娼婦……オット」

次に出したのは、湯気とニンニクの香りが沸き立つ赤いスパゲッティのようなパスタ料理。

その名を言いかけたトニーは、寸前で黙ってしまった。当然だ。

普通、小学生の前でその名前を出すのは、憚られる事だからだ。

……名を「娼婦風パスタ」。

あまりにも忙しかった娼婦が、有り合わせの食材で適当に作った結果出来たという。

ニンニクを使ったパスタには普通チーズはかけないが、これはかけて食べる。

作者はイタリア料理に詳しくないので詳しくは解らないが、おそらくその娼婦は、今で言う「男の料理」「悪魔的料理」を作る感覚だったのだろう。

「娼婦……ああ、風俗嬢ね」

「スープの姉ちゃんが作ったのか」

そして拓海とセントは、そんなトニーの心配を他所に、娼婦の意味を理解して平然とR-18ワードを出して話している。

これにはトニーも思わず「マンマミーア……」と呟くのであった。最近の子供はマセているのだ。

「で、ではゴユツクリ……」

トニーはメインディッシュを作り、厨房へと戻る。  
セントは娼婦風。パスタを前に、じゅるりと舌なめずり。

「へへっ、俺辛いのが好きなんだよな〜」

ピリリとした赤唐辛子の香り。

小学生男子は、病みつきになる辛さだ。

セントがフォークをパスタに伸ばした、その時。

「待て！セント！」

拓海がそれを止めた。

「なんだよ拓海？」

「なんだよじゃない！明らかに変だぞ?!この店！」  
そうだ。

この店に来てから、変な事ずくしだ。

最初のミネラルウォーターもそうだ。

仮にあの効果がある自然の物だったとしても、そうなら他のミネラル  
ウォーターでそうした事例が出てないとおかしい。

そしてカプレーゼに至っては、見た所現行の食材だ。

それで肩が丸々作り替えられるほどの新陳代謝が起きるなど、勿論  
聞いた事がない。

「ストレイジ！」

『はい！マスター！』

拓海は立ち上がり、ストレイジを天に掲げる。

『ご唱和ください！我の名をッ！』

「ストレイジ！セーリットアーニップ!!」

光に包まれ、拓海はバリジャケットを身に纏う。

そしてセットアップしたストレイジを、自分に渡されたパスタの皿  
に向ける。

「な、何する気だよ拓海?！」

「俺の予想が正しければ……シユートバレット!!」

日本人として食べ物で粗末にするのは気が引けたが、拓海は皿に向  
けてシユートバレットを放った。

低出力だった為に机も皿も割れなかったが、がしゅんっ!という音

と共にパスタが空中に舞い上がった。

「ああ！勿体ねー!!」

嘆くセントだが、直に次の異変が起こった。

シユートバレットにより魔力を流された事で、パスタの中に隠れていた「それ」が、姿を表したのだ。

『メツシヤアアア~~~~ツツ!』

「な、なんだこりやあ?!」

思わず、セントも叫びを挙げる。

パスタの中から、パプリカに目と腕を付けたような小さな異形が現れたのだから。

「ストレイジー!こいつは……………!」

『使い魔でございます!』

……………使い魔。

魔法が存在する様々な作品にて耳にする単語であり、多くの場合魔法使いに使役される動物やモンスターの事を指す。

「リリカルなのは」においても、それは似たような存在として登場する。

生物の体を依代にして、魔導師が作成した人造魂魄を宿らせて命を与えた存在だ。

使い魔は魔導師の魔力を受けて生命を維持し、その命令を受けて行動する。

近い例では「フェイト」のパートナーである「アルフ」がそうだ。

そして眼前にいるこの使い魔。

恐らく、こいつに魔力を与えている魔導師は……………。

『メツシヤアアア~~~~!!』

「逃げたッ!?!」

使い魔が、厨房の方向へと逃げてゆく。

これで疑惑は確信に変わった。

あの使い魔のマスターは、トニーだ。

「セント、そのパスタ絶対食うなよ?!いいな!」

呆然とするセントに釘を刺し、拓海は厨房へと駆け込む。

ばあんっ！と厨房の扉を開けると、使い魔とトニーが何やら話しているのが見えた。

「おいあんた！なんて物食わせてんだ！何が目的だ?!」

怒鳴り込んできた拓海を見た途端、トニーの表情が変わった。

「それ以上入るな・アアアー……ツツツ!!」

「ツツ!」

怒号、と言うよりは最早咆哮と言った方がいいだろう。

縄張りに入ろうとする拓海への、威嚇にも見えた。

「ずずずっ！ずずずっ!」

「なっ!」

威圧された拓海の背後で、ずずずとパスタを吸う音が聞こえた。

まさかと思いきや振り向くと、そこには案の定、娼婦風パスタを啜るセ

ントの姿。

「セント！お前何食ってんだ?!」

「我慢できねーんだよツ！この辛さ！このうま味！癖になりそう

だっ！やめられねえ止まれねえー……ツツツ!!」

娼婦風パスタは、セントの舌にクリーンヒットした。

そしてセントは、歓喜の叫びを挙げる。

「うんまああ〜〜いツツツ!!」

そして次の瞬間。

セントの腹が破れ、その中身がだらりと飛び出した。

「セントおぉ!!」

拓海が叫ぶ。

普通考えて、ああなっちゃってしまっただけは助からない。

そしてセントに気を取られて、拓海はすぐ背後に迫っていたトニーに気付かなかった。

「(やべ………ツ!?)」

トニーが、何かを振り下ろす。

回避も、ラウンドブロッカーによる防御も間に合わない。

拓海は身構える。

すると。

「ここでは石鹸で手を洗いなサイツ!!」

「……………は?」

覚悟していたような、攻撃の類いは無かった。

トニーが振り下ろしたのは、四角く白い固形の石鹸。

それも、拓海に当たらないように目の前に。

「調理場は常に清潔でなくてははいけません!人の口に入る物を作るのですカラ!そこに土足で入るなどいくらお客様でも言語道断横断歩道なのデス!!」

いや、言っている事は解る。

トニーが言っている事は、料理に縁の薄い拓海でも理解は出来る。だが、それを今言われても思考が混乱するだけである。

が、そこに。

「おいどうしたんだよ拓海?」

「セント?!」

何かあったのか?と、何事も無かったかのように振る舞うセントの姿。

「モツ」は引っ込み、腹も元通りになっている。

「な、なんとも無いのか……………?」

「ん?ああ、昨日から下痢気味だった腹の様子が良くなったぜ!」

それ所か、腹の調子が良くなったようだ。

というかセントよ、仮にもサッカー少年が随分不健康ではないだろうか。

「……………ううむ」

なんとも言えない雰囲気にも包まれる、男三人。

拓海は少し考えた後、思っていた事を口に出した。

「……………トニーさん」

「ウイ?」

「あなた、もしかして転生者?」

「エツ?!」

「……………俺もなんですよ」

「エエツ!?!」

.....

拓海が自分と同じだと知ったトニーは、自らの事を二人に話した。トニー・クローバーは、元はイタリアの片田舎の、貴族の家系に生まれた長男であった。

だがトニーは、家を継ぐ事よりも、幼い頃からの夢であった料理人になる道を目指した。

当然、両親は反対した。

だが、いくら貴族の家系と言っても、トニーの元いた時代である1980年代には既に没落して一般市民と大差ない事。

そして何より、トニーの熱意に折れて、両親はトニーの夢を応援する事にした。

そして料理の修行の為に、都会の学校に行く為にバスに乗った。だがバスが事故を起こし、トニーは他の乗客共々死亡してしまう。

そしてトニーは、拓海や他の転生者と同じように、神性の存在に出会った。

彼の無念を聞き入れた神はトニーに、

食材と一体化して食べられる事で、相手の身体を癒す使い魔「メツシャー」を転生者特典として与え、この世界に転生させた。

そして、料理の修行をやり直し、店を持てるようになって今に至る。という訳だ。

.....

「.....つまり、俺達と敵対して、世界を好きにしてやろうとか、そういうのは無いんですね?」

「はい、私はただの料理人デス、料理で皆様を笑顔にできればそれでいいのデス」

鎌瀬やジェラシーマスクのように、この世界を好きにしてやろうとしている訳ではなく、拓海達と敵対する意思も無いらしい。

料理の一連のあれこれも、セントの健康を気遣ったの事だ。

拓海達は、ホッと胸を撫で下ろした。

「……………トニーさん」

……………が、どうしても言いたい事が一つだけある。

それは。

「流石に肩が抉れたり内臓が飛び出るような演出はやめた方がいいと思いますよ」

「……………善処します」

『メツシヤアア……………』

バツが悪そうに、メツシヤアが唸っていた。

……………海鳴の隠れ家レストラン・スイートシュリンプ。

ちよっぴり癖は強いけれど、海鳴に来た時には探してみるのも、いいかも知れない。

### 【転生者名鑑】

・トニー・クローバー

海鳴にある隠れ家レストラン・スイートシュリンプを経営しているイタリア人料理人。

紳士的で物腰柔らかだが、料理にかける情熱は人一倍強い。前世で叶えられなかった料理人の夢を叶える為に転生した。

料理の腕は天下一品で、隠れ家とはいえ若くして一等地に店を構え、料理に疎い拓海やセントですら唸らせる程。

少しカタコトの日本語を話すのが特徴。

・転生者特典：メツシヤ

トニーを転生させた神性から与えられた使い魔。

料理と一体化し、相手の体内に侵入して身体を癒す能力を持つ。

が、その際の演出が少々グロイのが玉に傷。

「アルフ」や「リーゼ姉妹」と違い、知性はあるが発声能力はなく

「メツシヤアア〜！」という鳴き声？を発する。

ベースとなった生物はパプリカらしい。



### 第3章 「戦いへの序章・前編」 第9話

彼女は、愛する人が自分の知らぬ所で戦っていたと知り、深い後悔と罪悪感に襲われた。

本来なら彼は、守られるべき年齢の子供である。

いくら魔法の才能や前世の記憶があると言っても、肉体的にはまだ9歳。

傷つき易く、壊れてしまいそうな存在である事には変わりない。

だから、彼女は6年もの間彼を守り続けた。

彼の傷ついた心を癒し、抱き締めた。

まるで、姉か母親のように。

けれども……彼を守りきる事は出来なかった。

それ所か、一時的とはいえ、彼は彼女の元から離れてしまった。

その上、苛烈な戦いの中に放り込まれて、死にかかった。

どうにか彼を繋ぎ止めようと、手元で守り続けようと、時期は早すぎたが彼に純潔を捧げた。

彼女の思惑通り、彼は自分の身体に夢中になった。

身体を利用するようで気が引けたが、二人の間の繋がりは、間違いなく以前より深くなった。

これで、ずっと側に居てくれる。

私の可愛い「たつくん」で居てくれる。

そう思っていた……が、それも思い上がりに過ぎなかった。

その日、彼女は二度目となる、転生者が起こした事件に巻き込まれた。

彼を守ると言っておきながら、彼女は戦いに参加すら出来なかった。

彼の隣に立てないという悔しさ。

結局守られる立場という悔しさ。

それから脱却する為に、彼女はある決心をした。  
自分も力を……魔導師の力を、手に入れる事を。

……

第5無人世界「クリシス」。

広大な荒れ地と廃墟の広がるこの世界は、太古の昔に起きた大規模な戦争により、一度滅んだ世界。

そして、現在時空管理局による自然の再生が進んでいる世界でもあり……

……管理局に反感を持つ、反管理局勢力の一つの、隠れ家でもある。

そんなクリシスの空を飛ぶ、二つの影。

一つは、ストレイジをセットアップし、バリアジャケットに身を包んだ拓海。

そして、もう一つは。

「いい？目的は戦場に慣れる事、言姉えは後ろからシユートバレット射つだけでいいから」

「は、はい……ッ！」

なんと、そこに居たのは桂言葉、その人。

武装隊が着ている物と同じ、装甲のついたバリアジャケットに身を包み、

その手に握られているのは、「レイジングハート」を簡略化させたような、本編でモブの武装隊が装備しているデバイス。

着なれないバリアジャケットと、持ちなれないデバイス。

それに身を包んだ言葉は、なんとというか「着せられている感」のよ  
うな物が強い。

……何故、彼女がバリアジャケットを着て、まるで魔導師のよう

な事をしているのだろうか。  
その理由は、数日前に遡る。

.....

ある日の事、いつものように拓海が家に帰ると、言葉が大事な話があると言ってきた。

何だろうと思つた拓海に対し、言葉は一言、こう言った。

「私ね、たつくん達みたい魔法使いになろうと思うの」  
面食らつたのも無理はない。

と、言うのも、前回のジェラシーマスク戦や、その前の転生者大戦の時から、拓海が戦っているのに自分が何も出来ない状況を変えたいとの事。

当然、拓海は反対した。

言うまでもなく魔導師の仕事というのは危険な物であり、ましてや転生者との戦いに言葉を巻き込みたくないからだ。

しかし言葉の必死の説得に折れて、体験で一度という条件つきで、彼女にデバイスを握らせる事になった。

.....

本来ならクロノのようなプロに付き添いを頼むのがいいのだが、他の事件を追っていて忙しく、結局拓海が一人で付き添う事になった。

まあ、反管理局勢力と言つてもちよつとしたチンピラのような連中だし、デバイスを持った魔導師相手には手も足も出ない連中だ。

言葉が拓海の言う通り、後ろでシュートバレットを撃っているだけなら、何の心配もないだろう。

『マスター、出てきたでありますよ』

「……………ああ」

ストレイジが言った通り、廃墟の間からマシンガンを持った数人のゲリラ兵が現れ、こちらに発砲する。

「きゃあっ！」

こちらに飛来した弾丸に、言葉は驚いてしまう。

……………が、デバイスはおろか、バリアジャケットにも傷はつかない。

「落ち着いて言姉え、バリアジャケットを展開している間は銃で撃たれても何の問題もないよ」

言葉を諭す拓海。

そう、自分達とは異なる文明や技術、危険な魔導生物や怪獣と対峙するリスクのある管理局。

量産品のデバイスとバリアジャケット一つにしても、銃弾ごとときで破れるようには出来ていない。

「言姉えはシュートバレットで援護して！絶対に前に出ないで！」

「わ、わかりました！」

拓海は言葉に援護をさせ、自分はゲリラ兵の方へと突っ込む。

ゲリラ兵はマシンガンを乱射するが、拓海にも言葉にも通じない。

「だりやあっ！」

「ぐえっ?!」

そして、あっという間にゲリラを制圧してしまった。

魔導師としては新人もいい所である拓海だが、やはり日々の努力と鍛練の結果は大きい。

「ざっとこんなモンかな……………」

倒れたゲリラ兵達をバインド……………拘束魔法で縛り、この戦いをモニターしてもらっている管理局員に報告しようとした、その時。

「うわあああ~~~~ッ!!」

「うおっ?!」

突如、ビルの影から新たに現れる敵！

拓海は咄嗟に、ストレイジの刃でそれを受け止める。  
が、きんっ！

最後のゲリラ兵は、ナイフを持っていた。  
それで斬りかかったのだ。

……問題は、ストレイジとつばぜり合いをしている、そのナイフである。

刃まで黒いジャックナイフのような姿をしたそれは「AMナイフ」と呼ばれる。

AMとは「アンチマジカル」の略で、その名の通り魔法を無効化する事ができる。

流石に、刃を触れあっているストレイジが折れるなんて事はないが、あれはバリアジャケットでも防げない。

……魔法を無効化する技術は、本来なら今いる時代よりも未来の「Force」に登場する技術だ。

今の、一期と「A's」の中間の時代では、対処の仕様ががない。幸運だったのは、そのAMナイフが転生者の技術による物であり、

管理局の驚異となる程は広まってなかった事だ。

「貴様！何故その力を管理局の為に使うツ!？」

「何……?？」

ゲリラ兵が、拓海に向けて叫ぶ。

「時空管理局は腐っている！それを正さねばならない事が、何故わからない!!」

……時空管理局が、傲慢で腐った強盗組織と言うのは、転生者の偏見に基づくデマ同然の風評だ。

管理という言葉が、あかたも次元世界を支配してるように聞こえるからだ。

が、それでも胸を張ってクリーンな組織ですとは言えない。

これから先の時代の「Striker」「Vivid」「Force」で起きる事件のいくつかは、管理局の暗部が招いた物だ。

それに、拓海とストレイジが出会った理由である「ばら蒔き」といった、キナ臭い事もやっている。

腐敗した組織というのは、あながち間違いとは言えないだろう。

「その腐った組織でも、その元で暮らしてる人達が一杯いるんだ！

その人達を危険に晒す事が、正義なワケないだろ!!」

だが拓海の言う通り、管理局の統治の元で多くの人達が平和な暮らしを送っている。

ようは「ガンダム」に登場する「地球連邦」のような体制側と同じだ。

いくら腐敗していると言っても、反乱を起こして滅ぼしていいワケがないし、

罪もなき市民達から「腐敗した組織に守られているから」という理由で平和を奪い取るなど、許されるワケがない。

……それに、そうした巨大な組織の中でも、正義の為に動いている人達を、拓海は知っている。

「つーかテロリスト風情が正義を語ってんじゃねえっ!!」  
バキンッ!!

ストレイジによる一撃が、ゲリラ兵を弾き飛ばす。  
離れてしまえば、魔法は使える。

「シユートバレット!」  
「うわっ!」

そして、反撃を防ぐ為にシユートバレットでナイフを狙撃し、落とす。

そこにすかさず、バインドを展開。  
ゲリラ兵を拘束した。

「こ、この野郎! 離せ! 離せ!!」  
「うっさい!!」

「うっ……………」

そしてストレイジでばこんっ!と頭を叩き、気を失わせる。  
こういう時、非殺傷設定は便利だ。  
「……………制圧完了、と」

今度こそ、連中の制圧は完了した。

## 第10話

転送魔法で管理局の方に、拘束したゲリラ兵を送る拓海。  
そこに、空から援護射撃をしていた言葉が降りてきた。

「お疲れ様、言姉え」

「お、お疲れ様です……………はあ……………はあ……………」

動いたのは拓海の方だが、後ろに居ただけの言葉の方が、ぜえぜえと息を切らせている。

「はあ……………はあ……………魔法って、疲れるんですね」

確かに言葉は、刀の扱いには長けているが、それを戦闘に活かした事は一度もない。

それに、一般人には慣れない空中戦と、自分のスタイルとは真逆の射撃魔法しか使っていないのだ。

魔法の才能だって、最初の頃の拓海とどっこいどっこいだ。

「だから言ったでしょ、俺は反対だって」

まあ、拓海のように努力を重ねればなんとかなるだろう。

だが、拓海としては言葉がそれに気付かず、魔導師の道を諦めてくれればと思っていた。

「うう……………はあっ……………はあっ……………ふう……………」

それにしても、言葉は随分息を切らせているように見える。  
慣れない魔法戦で疲れた事を考慮しても、少々オーバーだ。

……………頬を赤くして、喘ぐように息を吐く言葉の姿はやけに艶かしいが、今気にするべきはそこではない。

「えっと……………どったの？」

やけに苦しそうな言葉に、拓海は心配そうに話しかけた。  
すると。

「胸が……………」

「胸？」

「圧迫されて……………苦しくて」

ああ、そういう事か。

言葉の説明を受けて、拓海は色々と察した。

まず、以前から何度も話しているが、桂言葉は胸が大きい。

「School Days」の公式情報では100cm以上もあり、ネットの住人が計測した所Jカップという、巨乳の持ち主である事が解った。

更に言うと、その乳房は今でも成長を続けており、その度にブラジャーを特注で頼まなければならないから大変らしい。

バリアジャケットの話に移ろう。

こちらは、コートの上から胸を覆うようにプロテクターが張り付けられている。

いくらバリアジャケットが強力と言えど、万能というわけではない。

もしもの時に、心臓のある胸を守る為にこれがあるのだ。

そしてこれは、「リリカルなのは」の本編ではモブで登場する武装局員達の着ている、共通デザインの物。

おそらく、特に設定を弄らずセットアップした際の、デフォルトの姿なのだろう。

同じストレージデバイスである「S2U」をセットアップした「クロノ」のそれを簡略化したような姿からも、それは伺える。

……長々と話してしまったが、つまりはこういう事。

胸のプロテクターが言葉の大きな乳房を押さえつけてしまい、結果乳房に肺が圧迫されてしまい、

呼吸が障害され、

結果本来よりも疲労を感じてしまった。

大きな乳房は魅力的だが、戦闘やアクションにおいては邪魔にしかない。

拓海は、前世で様々な巨乳キャラがこの視点からツツコミを受けていたのを思い出していた。

「だから……そーなんだよ、言姉えは魔導師には向いてないんだって」

拓海は巨乳は好きだが、言葉を戦いに巻き込みたくはない。



気が引けたが、ダメ出しをするように、言葉を説得しようとする。「でも……………たつくんが危険な目に逢ってるのに、私だけ見てるだけなんて……………!」

「いや、俺だって言姉えを危険な目に逢わせたくないから!」  
だが、大事な人に傷ついてほしくないのは、言葉も同じだ。

今まで拓海が知らない所で戦っていて、自分はそれを知らなかったという事への罪悪感も相まって、その感情は大きくなっていった。

互いに大事に思ってるからこそ、  
互いに守りたいと思ってるからこそ、  
二人の意見と主張は交わらず、平行線のまま続いていた。  
想いは同じなのに、皮肉な事である。

「……………あ、そうです!アリサちゃんみたいに剣のデバイスを作ってもらいましょう!そうすれば私も本気が出せます!」

「げっ!」

「バリアジャケット?も変えてもらいましょう!アーマーを胸に合わせてもらうとか!」

「げげっ!」

まずい、気づかなくていい事に感づかれた。

このままでは反論できず、彼女の魔導師入りを認めてしまう。  
どうにか反論はないものかと拓海が慌てていると。

「むあとうえええいっ!!」

そんな空気を切り裂き響く、凜としたつもりでアホさ加減が拭い切れない男の声。

誰だと思いい拓海と言葉が顔を上げる。

そこには。

「世の中には、モテない男が何人も居る……………それを差し置いて、巨乳女子高生との乳刷り合い……………その悪行を罪と知れ!」

崩れかかったビルの上に立つ、一人の男。

ムキムキに鍛えられた身体にびっちりしたコスチュームを纏い、マ

ントを羽織った姿は、まるで往年のアメコミヒーローのよう。  
ただ、顔を覆う覆面レスラーのような仮面は、額の部分に「妬」と書いてある。

それによく見れば、コスチュームもどこか安っぽいと言うか、チープに見える。

正統派アメコミヒーローと言うよりは、馬鹿にする目的のパロディで登場するギャグキャラ。

と言った感じだ。

「人それを邪悪と……うおお?」

決め台詞の途中、男の立っていた足場がぐらりと崩れる。

崩れかかったビルの上に立っていたのがよくなかった。

「うおわあああ……っ?!」

ビルはガラガラと崩壊し、男はそれに巻き込まれて瓦礫の山に埋もれる。

呆然とする、拓海と言葉。

そして少しの間を置いて、男は瓦礫の山を吹き飛ばしてその姿を現した!

「ジェラシーマスク見参!!」

「またお前かツ!!」

そう、その男はジェラシーマスク。

海水浴に行った時に怪獣ゲゾラをけしかけてきた、悪い転生者の一人だ。

あの時は取り逃がしたが、まさかこのクリシスに潜んでいたとは。

「ここで会ったが100年目、貴様にリベンジしてやるぞ!」

「やってみろよ!今度こそ捕まえてやる!」

ジェラシーマスクに対して、拓海は言葉を庇うように立ち、ストレイジを構える。

拓海は前回の戦闘でジェラシーマスクに勝っているし、何より奴の転生者特典である「はい論破」は、もう拓海には通じない。

優勢に立っているのは、拓海の方だ。

「ふふふ……出来るかな?」

それなのに、対するジェラシーマスクは、不敵な笑みを浮かべている。

まさか、何か裏でもあるのか？

拓海が怪訝な顔で睨む先で、ジェラシーマスクはサッと手を天に掲げる。

「出でよーマガオロチツツ!!!」

「なッ!？」

ジェラシーマスクの叫びと共に、大地を引き裂き現れたのは、巨大な赤い球体。

その周りには触手が植物のように生え、ウネウネと動き回っている。

「マガオロチって………!」

「ふふふ、モンスター銀河に生息する、星を食らう大怪獣よ!」

「マガオロチ」。

それは「ウルトラマンオーブ」において、前半のボスとして登場する強力な怪獣。

「魔王獣」と呼ばれる怪獣達の頂点に立つ存在であり、あの球体はその卵だ。

「そしてー……ツツ!!!」

「!!」

そんなマガオロチの卵の出現を前に驚く拓海に、ジェラシーマスクが突っ込んでくる。

回避は、間に合いそうにない。

「たつくん!!」

「あっ!」

瞬間、拓海の身体が弾き飛ばされる。

言葉が、拓海を庇って前に出たのだ。

「きゃあああ!!」

拓海を庇った言葉は、ジェラシーマスクの繰り出した一撃を受けて、苦しみ出す。

「言姉えッ!!」

言葉は苦しんだ後、糸の切れた操り人形のように、ぐらりと倒れる。それを、マガオロチの触手が捕らえる。

「うっ……………くああっ……………!」

苦しむ言葉。

ジェラシーマスクの攻撃を受けた所から紫色の瘴気のような物が広がっている。

どうやら、単に攻撃を受けたわけではないようだ。

「ふふふ、今あの牛女に撃ち込んだのはゴードス細胞だ!」

「ゴードス細胞だと?!」

解説するように言い放ったジェラシーマスクを前に、拓海は驚愕する。

ゴードス細胞。

それは「ウルトラマンG」に登場する邪悪生命体「ゴードス」の細胞であり、それが物質に付着する事で、様々な怪獣が誕生した。

そして、ウルトラマンG本編では、人間がゴードス細胞で怪獣になるという話がある。

つまり、ゴードス細胞を埋め込まれた言葉も……………。

「本来は貴様に植え付ける予定だったが、まあいい!そこで愛する者が怪獣になる様を指を咥えて見ている!」

そんな捨て台詞を残して、ジェラシーマスクは姿を消した。

「そんな……………させるかアツ!!」

そんな事はさせまいと、言葉を助けに行こうとする拓海。

だが、触手が邪魔をして前に進めない。

「このっ……………ッ!」

斬っても斬っても、触手は生えてくる。

一刻も早く言葉を助けたいのに、どうしようもない。

そんな拓海に、言葉は。

「……………大丈夫、ですよ、たつくん」

「えっ……………?」

ゴードス細胞に侵される苦しみに耐えながら、弱々しく語りかける言葉。

「この事を……管理局に……早く……！」

マガオロチもゴードス細胞も、危険な物だと感じた言葉は、この事を管理局に知らせるように言う。

今の拓海では、道連れになりかねないという思いから出た、提案でもある。

「……言姉えはどうなるんだよ?!」

「私なら……大丈夫、ですっ……耐えてみせま……ううっ！」

拓海は考えた。

この状況を打開する方法を。

しかし、いくら考えてもいいアイデアは浮かばない。

今の自分では、卵の状態のマガオロチの触手ですら、突破する事は出来ない。

仮に突破出来たとしても、ゴードス細胞をどうにかする事は出来ない。

『……マスター、ここは引くべきでございませす』

ストレイジも、打開案が思い付かない。

今の状態では、どうにもならない。

そして拓海は……苦渋の決断を下す。

「言姉え……絶対、迎えに来る！」

次の瞬間、拓海は転送魔法を使い、その場から姿を消した。

それを見届けた言葉は「それでいいんです」と言うように笑ったかと思うと、次の瞬間意識を手放した……。

## 第1話

仕事を終え、帰還する最中であつた次元航行艦アースラは、クリンスより脱出した拓海と合流。

そして拓海によりもたらされた情報を聞き、騒然となった。

「マガオロチにゴードス細胞……どちらも強力なロストロギアが、どうして……」

苦渋の表情を浮かべるクロノ。

周りにいる局員達も、不安な顔を浮かべている。

マガオロチとゴードス。

両方共、拓海達のいる地球には現れてはいない。

が、管理局は双方と遭遇し、交戦した事があつた。

特にゴードスの方は、出現した惑星諸共「アルカンシエル」で吹き飛ばす事で、なんとか撃滅できた程の強敵だ。

無論、二つ共がロストロギアとして分類・され、警戒されている。

その二つが再び姿を現したとなれば、緊張が走るのは当然だ。

「でも……変だねクロノ君、ジェラシーマスクにそんな規模の芸当が出来るとは思えない」

「ああ、僕もそう思う」

だがイズミの言う通り、転生者としても次元犯罪者としても三流であるジェラシーマスクが、そんな大それた物を2つも用意出来るとは思えない。

「……まあ、それはさておきだね」

たしかにそれは気になるが、まずは危険に晒されている言葉を助けるのが先だ。

イズミが、空中に立体映像のヴィジョンを映し出す。

そこには、クリシスにばら蒔いたサーチャー……監視カメラ付のドローンのようなもの……によって撮影されたマガオロチの卵。

そして触手により囚われ、ゴードス細胞の侵食を受けている言葉の姿が映されている。

その映像から、イズミは今の言葉の状況を分析した。

「どういう原理かは解らないけど、あのお嬢ちゃんは自力でゴードス細胞の侵食を抑えている」

「なんだとツ!？」

驚くクロノと拓海。

クロノは管理局からの資料で、拓海はウルトラマンGを一度見た事で、ゴードス細胞の恐ろしさを知っている。

だから、言葉がその侵食を抑えていると聞いて、信じられなかった。

「いやはや、何かのレアスキルか……………」

イズミもあり得ないと考えているらしく、その表情から驚きが見て取れる。

レアスキル……………」リリカルなのは」の世界において、その名の通り、普通の人は持っていない稀少な能力……………」の類いと考えるのが普通だろう。

「……………」でも助かる訳じゃない、分析の結果、これが維持できるのは後三日程だ」

「そんな……………」」

しかし、それが続くのは三日だけ。

それを過ぎれば、ジエラシーマスキの言った通り、言葉は完全な怪物となってしまう、二度と元には戻らない。

「……………」無論、このまま何もしない訳じゃない」

だが、それでも見捨てないのがクロノ・ハラオウンという男。通信魔法を展開し、ある場所へと繋ぐ。

そこは……………」

「ここらはアースラのクロノだ、聞こえるな? 無限書庫」

『うん、ばっちり』

通信魔法の先にあるのは、管理局の抱える巨大データベース「無限書庫」。

その名の通り、管理世界の様々な本やデータが納められた、気の遠くなるような巨大な巨大な書庫だ。

が、あまりにも巨大であるが故の弊害として、中身のほぼ全てが未整理のままだ。

本来の「リリカルなのは」において整理が始まるのは、今よりもう少し後の話。

だが、この世界・では今の時点で整理が始まっている。

この世界では犯罪者やロストロギアの他に、巨大怪獣や転生者も驚異として存在する。

それを考えると、まあ当然だろう。

「資料は先程送った、対ゴーデス細胞用の抗体を作る為の資料を探して欲しい」

『……………知ってると思うけど、整理自体始まったばかりだから結構かかるよ？時間』

そして、通信魔法の画面で怪訝な顔を浮かべているこの、ハニーブルンドの髪の可愛らしい少年こそが、整理を進めている功労者。

少年の名は「ユーノ・スクライア」。

知らない人からすれば、人間の姿は馴染みが薄い。

が、「なのはの肩に乗っているフェレット」と云えば、解るかも知れない……………多分。

スクライア族という、遺跡の発掘調査を生業としている種族の出身。

彼が発掘したロストロギア「ジュエルシード」が、PT事件の首謀者たる「プレシア・テスタロッサ」の手で強奪されかかり、海鳴に散らばる所から「リリカルなのは」の物語が始まる。

ユーノは一人回収を試みるが、ジュエルシードから生まれたモンスターに敗北。

大ダメージを負った彼はフェレットのような姿になり、なのはに助けられる。

そして、協力を申し出たなのはに「レイジングハート」を託し、魔法を教え、共にジュエルシード回収の為に奔走する。

……………ようは、それまでの魔法少女モノにおけるマスコットキャラクターの枠である。



そして、それらのマスコットではお約束の、主人の着替えやらお風呂やらに同室してしまうシーンもあり、「淫獣」等という不名誉な渾名をつけられてしまった。

また、放送当時のオタクからはそれでかなりのヘイトを稼いだらしく、クロノ共々言われなき苛烈なバッシングを受けた。

……彼の名誉の為に言っておくが、ユーノは決して性欲狂いの変態ではない。

純朴で心優しい少年である。

「三日以内でやってくれ」

『無茶を言う……』

「人の命がかかってるんだ、無理とは言わせん」

『うう……』

しかしながら、そうしなければ命と次元世界の両方が危なかったとはいえ、

ユーノの行動は「何も知らない少女を戦いに巻き込んだ」事には代わり無い。

クロノにはそれが許せないのか、度々ユーノに辛く当たるシーンがある。

「A's」でのフェレットもどき呼ばわりや、劇場版のコミカライズで、それが見られる。

『まあまあ、ハラオウン執務官も、そんなにユーノくんをいじめないでくださいな』

「ヘビクラ司書長！」

そんな、ユーノとクロノの間に割って入ったのは、長い金の髪を後ろでまとめ、緑色のタイトスーツ……「StrikerS」のユーノと同じ服装……に身を包んだ、一人の女性。

彼女は「シヨーク・ヘビクラ」。

現時点で、この無限書庫の司書長であり、ユーノと共にこの無限書庫の整理と探索を進めている女性。

「StrikerS」でユーノが司書長になっている事を考えると、彼女はその先代と言える。

まあ司書長と言っても、実質肩書きだけであり、整理探索が始まるまでは技術局に居た科学者でもある。

『資料の方はなんとか揃えてみます、私とユーノくんが一緒ならすぐですよ……………ねっ?』

……………外見的には、どこぞの騎士王が槍の位で召喚された最の姿に似ている。

その良すぎる顔的にも、その良すぎるスタイル的にも。

『ええ……………あ、はい……………』

そんな綺麗なお姉さんに近寄られれば、いくらユーノが純朴な少年といえども、頬を赤くする。

スーツに包み切れず、シャツごと外にはみ出た言葉並の乳房を押し付けられているのなら、尚更だ。

……………その様を見て、拓海はこの場に居ないのはに、少しだけ同情した。

君の恋のライバルは、思ってる以上に「デカスゴ」だぞと。

まあ、彼女が多くの方アンが望むように「なのフェイ」に走るなら、話は別であるが。

何はともあれ、抗体の開発は無敵書庫と技術局に任せるとしよう。

「それと、拓海」

「は、はいっ!」

拓海にも、やる事がある。

いつもの人員不足で拓海しか動かせないのもあるが、今回の事件が拓海が気を抜いたせいという事もあり、拓海自身も落とし前をつけたかった。

だが、今の拓海の実力では言葉を助ける事は出来ない。

そんな拓海に対して、クロノは。

「君には本局の「トレセン」に行ってもらおう」

「トレセンというのは……………あの、トレセンですか?」

「そう、そのトレセンだ」

トレセン……………それは、本局にある武装局員のトレーニングセンターの俗称だ。

様々な設備が揃っており、クロノは勿論、様々な魔導師が、そこで腕を磨くという。

「君には、そこである人物の元で訓練を積んでもらう………まあ安心してくれ、変人だが腕は確かだ」

どうやらクロノは、拓海にそこでマガオロチの触手を切り抜ける位の強さを身につけて来いと言っているようだった。

変人というワードが引っ掛かったが、コーチまでつけて。

「言姉え………必ず強くなって、助けに行くから！」

拓海の心に、決意の炎が宿った。

## 第12話

時空管理局本局。

次元の海に浮かぶ、その途方もない惑星レベルの巨大な建造物は、球体状の本体からいくつもシリンドラーが伸びたような形状をしていた。

SFに出てくるような、宇宙要塞を想像して貰えば早いだろうか。

クロノから、この本局にあるという「トレセン」に行くよう指示された拓海は、一人本局のメインフロアを歩いていった。

「二人で来るのは初めてだな……………」

民間協力者という立場上、何度か訪れた事はある。

けれども、一人で訪れたのは初めてだ。

……………辺りを見回すと、面識は無いが知っている顔がちらほら見える。

某通りすがりの仮面ライダー以降、違う作品同士を別の世界、つまるところの平行ワールドという認識が広がった。

それが反映されているのか、このような場所に行くと、これまでテレビやネットで見たような人物の姿を見る事が出来る。

右手には、下半身が馬のケンタウロスの女性や腕が翼になったハーピーの少女。

下半身が蛇のラミアの美少女らに囲まれて楽しそうに話している、人間の青年の姿。

左手には、エビフライの入ったおにぎりを美味しそうに食べるお姫様がいる。

それを呆れるように見つめる猫耳の少女と、ニコニコと笑っている幼いエルフ。

そしてやけにポケーツとした少年の姿。

巨大な盾を持った色素の薄い少女が、白い服を着た少年と歩いているのが見える。

少年の手には、赤い紋章のような物がちらりと見えた。

帽子を被り鞆を背負った子供が、猫耳と尻尾の生えた少女を本物の猫のように撫でていた。

隣では同じような格好だが全体的に青い子供が、別の猫耳の少女と絵を描いている。

白衣を着た医者のような青年が、近い特徴を持つ派手な格好の青年と対戦ゲームで遊んでいる。

すぐ側に「私が神だア!!」「ぶうん!!」と叫んでいる見るからにやべーやつが居たが、完全に無視されている。

「……………つと、見てる場合じゃない」

ここに来ると嫌でも気になってしまいが、今の拓海にはそんな物を気にしている時間はない。

……………

転送装置を乗り継ぎ、拓海がたどり着いたのは本局の一角。

目の前に広がる光景を前に、拓海は驚き、言葉を失う。

「ここがトレセンか……………」

時空管理局第3トレーニングセンター。

「トレセン」の通称で知られるそこには、拓海が見たことのないようなトレーニング器具が並び、

上を見上げると空中に浮いたステージの上で、魔導師達が組み手のように戦闘訓練を行っている。

前世で見た「ウルトラマン」のシリーズに登場した、宇宙警備隊の訓練施設。

そこに、イメージは近い。

万年人手不足の時空管理局は、新たな人材の育成に躍起になっており、いくつも訓練施設を持つ。

特にこの「トレセン」は、トップレベルの質と設備が揃っており、エ

リート魔導師の登竜門として有名だ。

そんな所で鍛えるのだから、間違いなく強くなれると、拓海は考えた。

「えっと、コーチは……………」

その為にも、まずはクロノの指定したコーチに会わなくてはならない。

急いで飛び出してきたので、コーチの名前や特徴を聞かなかった自分を責めつつ、拓海はそれらしき人物が居ないか周りを見回している。

すると。

「ハイー！ たつくん!!」

「!？」

突然響く、今まで言葉しか言ってなかった自分の渾名。

声の質からして、女性の物だ。

「ハイハイたつくん！ハイたつくん!!」

「だ、誰だツ!？」

どこぞの平成剣のように名前を呼ばれ、キヨロキヨロと相手を探す拓海。

そして、背後にただならぬ気配を感じ、振り向くと……………。

「!!」

そこには、一人の女が立っていた。

美女に分類されるのだが、少しだけ馬面風味。

赤い瞳の輝く垂れ目に、銀に輝く長い髪は、前髪をぱつんカットにしている。

頭には髪と同じ色のピンと立った耳が生え、尻の部分からは同色の毛の生えた尻尾が伸びている。

背は高く、体つきは全体的にがっしりしている。

乳房さえ無ければ、ロン毛の細マッチョ青年で通じるような、イケメンである。

……………それだけなら、ガタイのいいコスプレ美女で通ったのだが。

「スシ食いねえ!!!」

「なんで?!?!」

問題は、拓海がビュティ顔になってツツコミを入れる程の、それ以外の全てだ。

彼女は寿司屋を思わせる白い調理白衣と帽子に身を包み、

ロードランナーの上に皿に乗せた寿司を盛り付けていたのだ。

ロードランナーを回転寿司のレーンに見立てているのはなんとなく解った。

だが、何故そんな事をしているのか。

そもそも、これに意味はあるのか。

考えれば考える程、拓海は訳がわからなくなってくる。

「お前が高尾拓海か！クロノ執務官から話は聞いてるぜ！なんつか、三日寝込んだカレーみたいな仕上がりだな！」

「か、カレーで……………」

そして、この変人こそがクロノの言っていたコーチらしい。

たしかに変人ではあるが、拓海が予想していたのは「銀魂」に出てくるような、あくまで意志疎通が成り立つレベルでの変人。

だが、こいつは度が過ぎている。

同じジャンプのギャグ漫画でも「ボボボーボボーボボ」に出てくる

ような、意志疎通すら厳しそうな変人だ。

「アタシは「ゴールドシップ」！お前を最強の魔導師にする女だ！よろしく！」

「こ、こちらこそ……………」

随分変わった名前だなと思いつつ、拓海は変人こと「ゴールドシップ」の差し出した握手に答えた。

スツと、広げた両者の手が交差した様を見て、ゴールドシップが一言。

「ハト」

「……………うん」

まあ、確かに影絵で使うようなハトの形にはなっている。

が、ここでする事じゃないだろうと、拓海は心の中で突っ込んだ。

口に出さなかったのは、まともに突っ込み続けるのは無駄だと、本

能で察したからだ。

「それじゃあ、早速特訓に出発だ！アタシについてこい！」

「は、はい……………」

寿司を片付けて、ルンルンと聞こえそうなステップを踏みながら、何処かへ向かうゴールドシップ。

特訓の場所に向かうのは解るが、拓海は正直「こんなんがコーチで大丈夫なのか……………」と、不安がっていた。

「……………でも珍しいなあ、馬の耳に尻尾なんて」

それともう一つ。

拓海は当初犬耳か何かだと思っていた、ゴールドシップの耳と尻尾。

だが近くで見ると、それは犬と言うよりかは、馬のそれに近いと考えた。

「リリカルなのは」と同じ原作者の「DOG DAYS」からのゲストか？とも考えたが、あの作品は犬耳か猫耳だけで、馬耳のキャラクターなんて聞いた事もない。

「(馬耳……………さしずめ「ウマ娘」って所か?)」

……………拓海が、その悲惨な前世を終えた時代は、2020年である。故に、拓海はそこから先の時代を知らない。

だから、拓海にはゴールドシップの事は勿論、彼女の出典元である「ウマ娘プリティーダービー」の事も、まったく知らないのだ。

そもそも、今は2004年。

まだ擬人化ネタはファンの二次創作がメインであり、「ウマ娘」はまだ企画すら存在していない。

ゴールドシップのモデルとなった競走馬・ゴールドシップに至っては、産まれてすらいないのだ。

……………



ゴールドシップに連れられて拓海がやってきたのは、ドーム状の白い部屋。

広さはかなりある。

「ここは……………」

「アタシ達は「カンヅメ」って呼んでる、この中では外よりも時間が遅く流れてて、ここでの一日は外では二日になるんだ、原理はしらねーけど」

ゴールドシップの説明を聞き、某バトル漫画の「精神と時の部屋」のような物かと、拓海は納得した。

そんな拓海の目の前で、ゴールドシップは首から下げていたペンダントに触れる。

これが、ゴールドシップのデバイス「ステイゴールド」だ。

光に包まれ、次の瞬間ゴールドシップの頭にはヘッドギアと帽子が装着され、その身体深紅のバリアジャケット……………早い話が勝負服……………に包まれた。

そしてステイゴールドは、ゲーム演出でいつも振り回している金色の巨大な錨のような姿になった。

「アタシの頭に乗った風船、これに一撃を食らわせて割れ」

ゴールドシップは、どこから出したのか帽子の上に赤い風船を装着した。

「……………それだけ？」

「以外と難しいぜ〜？」

ゴールドシップは、挑発するようにステイゴールドを構えてみせた。

なるほど、クロノが推すだけの事はあり、強者のオーラのような物を感じる。

変人だけど。

「……………よろしくお願いしますッ！」

拓海も、ストレイジを構える。

相手が強ければ強い程、特訓のし甲斐がある。

こうして、言葉の救出の為の特訓が、幕を開けた……………。

## 【レジェンド列伝】

### ・ゴールドシップ

原典：ウマ娘プリティーダービー

「ウマ娘」と呼ばれる人類の亜種の一人。

モデルとなった競走馬ゴールドシップに、勝るとも劣らない破天荒な性格で、面白い事が大好きな自由人。

その一方で、落ち込んでいる仲間を励ましたり、理不尽に晒される仲間の為に怒る等、面倒見のいい兄貴分のような一面も持つ。

通称「ゴルシ」。

## 【転生者名鑑】

### ・ジエラシーマスク

アメコミヒーローのような風貌をした転生者。

デバイスを持たない上に、転生者としても次元犯罪者としても三下だが、独学で飛行魔法を習得する等、魔導師としてのポテンシャルはまあまあある。

生前、好きになった女性にことごとく振られ続け、童貞のまま死んだ事。

狙っていた原作ヒロインにも相手にされなかった事から、酷く嫉妬深く、他人の幸せを許せない。

### ・転生者特典：はい論破

催眠術の一種であり、自分の言う事に説得力を持たせる。

これを使われた相手は、ジエラシーマスクが言っている事がどれだけ滅茶苦茶な事でも、完璧な正論に聞こえてしまう。

が、相手が一度それが正論でないと認識したり、使う側の精神が乱れると効果が無くなってしまう。

## 第4章 「戦いへの序章・後編」 第13話

前章までのあらすじ

本人の希望により、魔導師になる為の訓練を受ける言葉。

だが、そこに待ち受けていたのは悪の転生者・ジェラシーマスクの卑劣な罠だった。

マガオロチに捕らわれ、ゴース細胞を埋め込まれた言葉を救う為に、魔導師達は様々な場所で行動を開始。

拓海もまた、クロノより紹介された魔導師・ゴールドシップの元で、強くなる為の修行を開始するのであった……………。

……………

「ダイバインシューターツツ!!」

ストレイジより展開した誘導魔力弾が、まるで誘導ミサイルがごとくゴールドシップに殺到する。

「どりゃあっ!!」

しかしゴールドシップは、飛来したダイバインシューターに対し、ステイゴールドの鎖部分を振り回して防御。

意図も簡単に弾いてみせた。

だが拓海は、そのゴールドシップの背後に回り込み、再びストレイジを構える。

「シュートバレット!!」

しかし、ゴールドシップはそれを読んでいた。

回転による遠心力を利用し、ステイゴールドを後ろに向けて投げつける。

それはシュートバレットを弾いただけでなく、拓海に向けて飛来。

そのまま、直撃する。

「うぐあつ?!」

ステイゴールドの直撃を受けた拓海は、そのまま後ろへと吹き飛ばされ、地面を転がる。

何度か地面をバウンドした後に、ようやく止まった。

拓海は、よろよると立ち上がる。

「はあつ……………はあつ……………はあつ……………!」

特訓が始まって一日が過ぎた。

いや、外の時間に換算すると半日程度しか過ぎていないので、そう言うのは変だろう。

あれから、ずっとゴールドシップに攻撃を仕掛けている拓海だが、依然として頭の風船は無傷のまままだ。

「どうしたつ?!もつとかかつて来い!そう……………現代を生きる莖わかめのように!!」

「い、意味わかんないですよ……………!」

このゴールドシップ、言動や行動は確かに変人そのものである。

だが、拓海は戦いを通じて、その魔導師としての実力が本物である事を知った。

同時に、自分が努力しているつもりでも、所詮は「井の中の蛙」だった事も。

今まで、何度も悪い転生者達を前にして生き残った。

が、よくよく考えればそれは運がよかったり、誰かと協力してなし得た勝利でしかない。

純粹な、自分の実力だけで戦い勝った事など、よくよく考えれば一度もない。

……………いや、腕試しに強盗と戦った時だけは一人で勝てたが、それは含まないだろう。

「……………ダメなんだ」

そう、ダメだ。

今のままでは。

誰かと一緒じゃないと勝てないままではダメだ。

「…………クソツタレな父親よ、あんたは守る者が出来ればわかるのか言ってきたな」

思い出すのは、忌々しい前世の記憶。

ある日父親が、イジメで精神的に追い詰められた拓海に対して「甘ったれるな」「世の中はもつと厳しいんだぞ」とゲキを飛ばした。

その時拓海は、ボロボロになりながらも「なんで追い詰められた人間にそんな酷い事が言えるのか」と、珍しく反論した。

その時、鼻血が出る程殴られた末に父親が放ったのが、この「お前にも守る物が出来ればわかる」である。

当然、これが昭和の熱血スポ根コーチ気取りの父親の口から出た台詞な以上、少しの説得力も持たないカツコつけである事は、

散々殴られ、怒鳴られ、萎縮させられ、挙げ句の果てに捨てるだの出ていけだのと脅され、人生を台無しされた拓海だから解る。

「シャクだけど…………字面だけは認めよう！ああ、俺は強くなりた  
い！」

本当は認めたくなかったが、台詞「だけ」を見れば言っている事は正しい。

そして拓海は、今以上の強さを望んでいた。

大切な人を。

守る者を。

この世界…………いや、前世を含めた人生の中で初めて、自分に愛をくれた人を助ける事が出来る程の、力を。

「ストレイジッ!!」

『合点でございませすですよ！マスター!!』

相棒・ストレイジも覚悟は決まっている。

「う、おおおおおーっ!!」

咆哮と共に、拓海はストレイジを構え、ゴールドシップに突撃する。その目には疲労が浮かんでいたが、問題ではない。

マガオロチとゴードス細胞に捕らわれた言葉の事を考えれば、こんな物は疲労に入らないからだ。

.....

管理局の仕事は、何も戦場で魔法を撃ち合うだけではない。

ここ、無限書庫がそうであるように、彼等が戦い易いようサポートするのも、立派な仕事である。

.....もつとも、「そんな物は男の仕事じゃない」と見下す者も多いが。

「これ.....でもない、これも違う.....」

ユーノ・スクライアは、次から次へと出てくる本を、開いては戻しを繰り返していた。

マガオロチとゴードスは、管理局のデータベースにも情報が少なく、何を調べればいいのかも解らない。

特にマガオロチに至っては、古代の伝承やおとぎ話の類いまで出てくる始末。

一応、資料はいくつも見つかったが、それでも科学的な抗体の開発に役立つかどうか.....。

「.....うつつ」

ふと、ユーノの視界が揺らいだ。

検索魔法は、高度な計算・演算が求められ、脳も酷使用する。

いくら彼の出身のスクライア族が検索魔法が得意とはいえ、長時間の計算は彼の体力を奪っていた。

まるで眠りに落ちるように、ユーノが意識を手放そうとした、その時。

.....ぼすっ

何か、柔らかいクッションのような物がユーノを受け止めた。

何だろうと思いユーノが顔を上げると、そこには。

「あ、ショーコさん.....」

「ガンバリすぎもよくないわよ?」

ショーコ・ヘビクラが居た。

意識を失いかけたユーノは、シヨーコの豊かな胸に飛び込んでいたのだ。

普段なら赤面して飛び上がる所だが、ユーノの受けた疲労が、その余裕を許さない。

「無茶は……し、してません」

なんとか、意識を正すユーノ。

そこには、気になる異性であるシヨーコの眼前でいい格好をしようとする他に、もう一つ理由があった。

「あまり戦えない僕が、なのは達の役に立つには……これ位しか、ありませんから」

それは、ある意味では「償い」である。

「リリカルなのは」の物語は、なのはがユーノからレイジングハート……つまり、魔法の力を受け取った事で始まった。

が、それは見方を変えれば、ユーノがなのはを、魔法という「戦いの世界」に巻き込んだ事でもあるのだ。

知つての通り、「リリカルなのは」における魔法というのは女兒アニメ然としたキラキラした物ではなく、ロボットアニメに例えられるような攻撃的な物。

そこに、地球の価値観においては、大人の加護下で守られているべきであり、ましてや女の子であるなのはを放り込んだ。

実際何度も危険な目に逢ったし、なのはの家族に叩き斬られても文句は言えないと、ユーノは考えている。

けれども、ユーノはなのはやクロノのように強くはない。

ただ防御と回復、そして検索魔法が得意な位だ。

だからそれを活用し、せめてなのは達が少しでも楽に戦えるようにと、ユーノは無敵書庫での仕事を引き受けた。

……まあ、2004年というとまだジェンダー価値観が「女の影でバトルの解説してるような男は、死んでいいだろ」が正論扱いされる時代なので、どっち道後ろ指は指されるだろうが。

『あー、もしもしー?』

ユーノが、疲れた身体にムチを打って検索に戻ろうとしたその時。

彼等の元に通信が届いた。

プロフェッサー・イズミからだ。

「あ、イズミさま……………」

『ストップストップ、用があるのはそっちのデカパイの方』

『プロフェッサー、それセクハラですよ?』

『メンゴメンゴ』

イズミのジョークを聞きながら、ショーコが通信を代わる。

「で、何の用です? セクハラオヤジさん」

『ウム、突然だけど前頼んでた資料、もうあるよね?』

「はい、既に揃ってますが?」

『あれ使うから、今のウチに回して欲しいんだ』

「と、言いますと……………」

ショーコの顔が、真剣な面持ちに変わる。

イズミが、無限書庫に連絡を入れた理由。

それは……………。

『……………「ダイナゼノン」を起動する!』



## 第14話

「カンツメ」での修行が始まってから、三日が過ぎた。  
外では、一日と半日ぐらいだろうか？

どっちにしろ、タイムリミットが刻一刻と迫っている事には変わらない。  
ない。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……！」

日々の猛特訓は、拓海の神経と体力をガリガリと削っていた。

それでもこうして立っていられるのは、ただ言葉を助けたいという  
想いによるものだ。

「さあ、このゴルシ様にかかって来い！」

対するゴールドシップは、連日の激闘にも関わらず、今もピンピン  
している。

無論、頭の風船はまったくの無傷。

いくらウマ娘が人間よりも高い身体能力を持っているとしても異  
常……いや、原典の「ゴールドシップ」の事を考えれば、原典通り  
のスタミナと見るべきか。

「……行くぞー！」

何度目になるか解らないが、拓海は余裕のゴールドシップに向け  
て、ストレイジを構えて突っ込んだ。

「だあっ!!」

「ふんっ!!」

ストレイジを叩きつけようとするも、ゴールドシップは直撃直前で  
飛び上がる。

……何度も、何度も拓海はこれを経験していた。

そして、何度も攻撃しては避けられるを繰り返す内に、ある事に気  
付いた。

………もしかや、ゴールドシップの攻撃にはパターンがあるのではな  
いか？

それらしき事は、何度も見ていた。

ゴールドシップの回避行動を見てみると、似たような行動パターンをしているように見える事が、何度も。

すると、勝機はそこにあるのではないだろうか？

そう思ったその時、拓海の頭に電流が走った。

「……………ストレイジ！」

『はい！』

そして、ストレイジもそれに同調。

途端に、拓海の脳が、急激に研ぎ澄まされてゆく。

連日の特訓による疲労で逆に研ぎ澄まされた脳と、ストレイジをリンクさせる。

すると、どうだろう。

脳という強大なスーパーコンピューターを得た事により増大した演算能力により、拓海の視界が変わる。

眼前に映る、地面に降りてくるゴールドシップのスピードが、途端に落ちたように見えた。

僅かな低速化であったが、拓海はそこからゴールドシップの着地点を予想し、駆け出す。

……………ガキンツッ！

ストレイジと、ステイゴールドの刃がぶつかり合う。

響く金属音と共に散った火花を前に、ゴールドシップは当初驚いた。

が、直ぐに笑顔になる。

「教え子の成長を喜ぶ笑顔に。」

「やるじゃあ……………ねーかッ!!」

ガキンツッ！

と、ゴールドシップに弾き飛ばされた拓海が、後ろに吹っ飛ばされる。

「くっくっくっ！」

ストレイジの切っ先を地面に突き立て、拓海は体勢をキープ。

が、その眼前では、ゴールドシップがステイゴールドをこちらに投げつけようと、ぶんぶん鎖部分を振り回していた。

「これならどうだア!!」

ゴールドシップの規格外のパワーにより、ステイゴールドはぶおんっ!!と、拓海に向けて投げつけられる……………

その、直前。

またも、同じ現象が起きた。

ステイゴールドを投げつけようとするゴールドシップの動き。

それが、先程異常にスローに見えたのだ。

そして。

「……………よしッ!!」

研ぎ澄まされたのは、何も脳だけではない。

神経が、根性が、決断力が、放出されるアドレナリンにより、拓海に冒険を引き起こす。

「……………たあっ!」

拓海は飛び上がり、向かってくるステイゴールドに突っ込んだ。

否、その上に乗った。

ステイゴールドの錨部分に、空中で飛び乗ったのだ。

そしてステイゴールドを蹴り、空中で加速。

そこに飛行魔法を加える事で、一気にゴールドシップとの距離を詰める。

が。

「(届……………かない……………ッ!)」

それでも、まだ距離がある。

あと一歩、届かない。

ならば。

「……………シュートッッッ!!」

最後の勝負は、これだ。

放つシュートバレットに全てを込めて、魔力の弾丸を撃ち出す。

これなら……………。

……………

「うわっ?!」

「ぶわっ!?!」

「……………どんがらがっしやあー……ん!!」

次の瞬間、ゴールドシップと拓海は真正面から大激突。

そのままこんがらがりながら、カンヅメの内部を転がり、壁に大激突。

それでようやく、制止した。

「いてて、て……………」

ゴールドシップの胸の谷間に飛び込む事になった拓海であるが、全身の痛みが反応を許さない。

そして何より、もっと注目すべき事が、眼前で起きていた。

それは。

「……………あっ!!」

ゴールドシップの胸の中で拓海が見たもの。

それは、彼女の頭。

帽子の上に乗っていた風船が割れ、伸びたビニールがヒラヒラと風に揺れている光景であった。

「これって……………!」

「ああ……………合格だ!」

「やったああああ!!」

三日にも及ぶ修行を終え、とうとう試練をクリアした拓海は、飛び上がって喜んだ。

「あああ……………ううっ?」

が、その直後ぐらりと視界が歪み、身体力が抜ける。

ゴールドシップは、倒れかかる拓海を、そっと受け止める。

『ま、マスター?!リリカル大丈夫でございますか!?!』

「気にすんな、ぶっ通しの特訓で疲れただけだよ……………こんな時は、だな」

ゴールドシップが、何か小さな豆のような物を取り出す。

朦朧とする意識の中で、拓海はそれが、恐らく有名な「アレ」ではないかと思いつく。

「ゴールドシップさん、それ……………仙豆?」

「ピンポーン☆」

……………仙豆。

説明不要の世界的バトル漫画「ドラゴンボール」に登場するアイテムの一つであり、どんなダメージを受けていても食べるだけですぐに回復できてしまう、優れものだ。

「仙豆だ、食え」

「む……………」

何故ゴールドシップがそれを持っているかはさておき、とりあえず拓海は渡された仙豆を口に含む。

すると、それまで感じていた疲労感や痛みが嘘のように引いてゆき、意識もハッキリとする。

「ふう……………」

スックと立ち上がり、改めて拓海はゴールドシップと対峙する。

「よく特訓を乗りきったー!これはアタシからのささやかなプレゼントだ」

ゴールドシップはそう言うのと、拓海を持つストレイジに手を翳し、何やら魔法のデータを送り込んだ。

『マスター!リリカルすごい力を感じるでございますよ!!』

興奮気味のストレイジ。

きつと、すごい魔法なのだろう。

「今送ったのは『ディバイランス』のデータだ、ついこの間送られてきたバル……………なんとかのデータを元に組んだんだ」

と、どや顔で言ってみるゴルシ。

バルなんとかというのは、恐らく「フェイト」の「バルディッシュ」の事だろう。

世にも珍しいミッド式の近接戦闘用デバイスで、しかも天才科学者であるプレシアの作品だ。

きつと、面白いデータがわんさか取れたのだろう。

「今の感覚を忘れんじやねーぞ、これとディバイランスを組み合わせれば、きつとお姉さんを助ける事が出来る!」

「はい！ゴールドシップ教官！」

「ああ！このゴルシちゃんが保証する！なんならこのカシオミニ（電池切れ）を賭けてもいい!!」

「それはいいらないです」

ゴールドシップの特訓に感謝しつつも、拓海は現代っ子の視点から電池切れの電子辞書は丁重に断るのであった。

ともかく、拓海はストレイジとのリンクによる未来予知染みた反射神経と、新たな攻撃魔法・ダイバイランスを習得した。

どの程度通じるかは解らないが、これで言葉救出に近づいたはずだ。

「……………今行く、待っててくれ、言姉え！」

……………その後、無限書庫で得られた資料により、対ゴードス細胞の抗体が作られたという情報が入り、拓海は直ぐ様クリシスに向かった。

言葉が捕らわれている、クリシスに……………。

## 第15話

クリシスに、あれから二度目となる日の出が上がってきた。  
廃墟の中に鎮座するマガオロチの卵。

そこから伸びる触手によって礫にされた桂言葉は、意識を失ったまま助けを待ち続ける。

「フフ……………後一日……………」

ジェラシーマスクは、この二日をここで過ごしていた。

人質がいる上に、無闇に攻撃をすればゴードス細胞・が活性化する恐れがあり、管理局が手を出せない為だ。

「に、しても……………」

ジェラシーマスクは、ふと礫にされた言葉を見上げた。

この手の展開の王道か、それともマガオロチがゴードス細胞を注入し易くしたのか。

彼女の着ていたバリアジャケットは各部が溶けてボロボロになっており、それまで装甲に押さえつけられていた胸も露になっていた。

「いつ見ても……………イイ女じゃあないか……………ひひひ」

大事な所こそ隠されているが、ぴっちりインナーが張り付いた見事な乳袋をしている。

流石はエロゲー出身なだけはある、見事な巨乳だ。

「それを見ているだけしか出来ないなんて……………クソツタレ！」

本当なら、ジェラシーマスクもこの極上の女体に今すぐにも飛びかかりたかった。

が、彼女の身体を蝕むゴードス細胞が、それを許さなかった。  
完全にゴードス細胞に侵され、怪獣となれば大丈夫なのだが、

今の言葉に触れよう物なら、自分もゴードス細胞に侵される事になる。

ましてやセツ……………粘膜接触など、もっての他である。

「あのガキ……………いつも一緒に風呂に入ってたんだろうなあ……………!!  
クソツ！クソツ！妬ましい!!」

だからジェラシーマスクは、言葉と一緒に居る拓海を妬みつつ、磔にされた言葉を見ながらブツをシゴくしか出来なかった。

……きつと、実際はお風呂所か、既に身体を重ねる関係なのだという事を知れば、ジェラシーマスクは憤死するだろう。

「クソッ！クソッ！……むっ？」

いつものようにズボンを下ろそうとした、その時。

登る朝日をバックに、こちらに飛来する影が一つ。

「……来たか！」

そこに居たのは、ストレイジを構え、こちらに向かい飛翔する拓海の姿。

「あのガキイイイッ!!」

ジェラシーマスクが、拓海に向けて飛び上がる。

拓海が気がついた時には、既にジェラシーマスクは眼前に迫っており、拳とストレイジの刃が空中でぶつかる。

「ジェラシーマスク！」

「丁度お前を妬ましいと思つてた所だア!!」

「何がだッ!!」

刃と拳をぶつけ合いながら、昔のロボットアニメのように言葉を飛ばし合う両者。

「俺はあの女を見て自慰しか許されない！あんな女体が眼前にいるのにだ！ゴーデス細胞があるからな！それをお前は毎日お風呂でえっ!!」

「な……ッ!!」

瞬間、拓海の脳に怒りの感情が込み上げてくる。

ジェラシーマスクの言う通り、ゴーデス細胞がある為に別に言葉は身体に何をされたとかという訳ではない。

けれども、自分を優しく包み込んでくれる彼女の身体が、ジェラシーマスクの欲望の捌け口にされた事が、拓海にはどうしても許せなかった。

「てめえ!!!」

怒りのまま、拓海はジェラシーマスクを弾き飛ばす。



そしてシュートバレットを発動しようとした、その時。

『マスター！リリカル落ち着くでございます！』

「す、ストレイジ……………」

『言葉さんは何もされてない！クールダウンでございます！』

「そ、そうだな……………」

怒りのまま戦おうとしたが、ストレイジにより落ち着きを取り戻す。

オカズにされただけでも腹は立つが、言葉がジェラシーマスクに汚された訳ではない。

むしろ、実際に身体を重ねている分、自分の方が奴にマウントを

……………」

「……………ん？」

その時、冷静になった事で拓海にある考えが浮かんだ。

その名の通り、ジェラシーマスクは嫉妬の塊である。

そして拓海は、ジェラシーマスクにマウントを取れる立ち位置にいる。

ならば。

「……………いい事思い付いた♪」

……………彼の、なけなしの名誉の為に言っておくが、

一応彼は物語の主人公をなんとかやれる程度には、人並みの善性を持った人間である。

しかし、彼も所詮は社会不適合者の陰キヤの子供部屋おじさん。

そう、某銀行員の逆転ドラマ的に言うところ「ゴミクスめ！」なのである。

「ジェラシーマスク！」

「な、何だッ!？」

唐突に自分の名前を呼ばれ、拓海を睨み返すジェラシーマスク。

こちらを見下ろし、(わざと)得意気にニヤニヤと笑う拓海の姿は、ジェラシーマスクの苛立ちを煽る。

「あんたさつき……………俺が言姉えと一緒に風呂に入ってるみたいなお事言ったよな」



「お前に構っている暇はないんだよ！」

……………どごんっ

強烈な一撃。

魔力で強化された一撃は、白目を剥いたジェラシーマスクを吹き飛ばし、下にあつたビル群に叩きつける。

ジェラシーマスクは、そのままぐったりして動かない。

非殺傷設定なので、死んだなんて事は無いだろう。

「……………さて」

そう、ジェラシーマスクなんて三下転生者、何の問題もない。

拓海が修行を重ねた理由。

それは、今マガオロチの卵に捕らわれ、ゴースト細胞に侵される想い人を。

桂言葉を助ける為だ。

「……………行くぞ、ストレイジ！」

『合点承知！』

一切の迷いもなく、拓海は眼下のマガオロチの卵目掛けて、突っ込んだ。

自分の孵化を邪魔する敵が来たと本能で察したのか、はたまた新しい餌にしてやろうとしたのか。

卵から無数の触手が伸び、拓海を捕らえようとする。

そして、今こそ修行の成果を見せる時。

「……………!!」

神経が研ぎ澄まされ、拓海の脳と、ストレイジのAIがリンクする。途端に、こちらに向かってきたマガオロチの触手が、えらくスローに見える。

拓海は、触手と触手の間を、スルスルとすり抜けてゆく。

まるで、最初から進むべき道が解っているかのように。

捕らわれた言葉まであと一歩。

そこでマガオロチの触手は、無数に絡み合って拓海の進路を妨害する為の壁を形成する。

これなら避けられまい。

そう、言っているようにも見えた。

だが、拓海には何の問題もない。

これを突破する為の秘密兵器も、既にあるのだから。

『あれの出番ですよ！マスター！』

「ああ！デイベインランスだ！」

ストレイジの先端に、魔力が集中。

拓海はそれを、銚を打ち込むがごとく、触手の壁へと突き刺した。

「デイベイイン………ランスツツ!!」

バツキヤアアツ!!

触手の壁は、まるで爆弾が爆発したかのように吹き飛んだ。

………デイベインランス。

それは、デバイスの先端に圧縮した魔力を集中し、叩きつけると同時に解放。

爆発的な力で、対象を破砕する。

言ってみれば、魔力パイルバンカーだ。

より少ない魔力で、デイベインバスターに匹敵する破壊力を産み出すが、相手に接近しなければ使えないのが難点か。

とはいえ、これで邪魔はなくなった。

後は………。

「言姉えっ!!」

眼前に、言葉がいた。

捕らわれの姫の救出まで、あと一歩だ。

## 第16話

「言姉えっ!!」

触手の妨害を乗り越え、拓海はついにマガオロチの触手に捕らわれた言葉の前にたどり着いた。

バリアジャケットの一部が溶け、彼女の白い柔肌が露になっている。

この手のお約束か、胸を覆う装甲は既になく、彼女の豊かな胸の谷間が見えていて大変いやらしいが、今はそんな事気にしている場合ではない。

「効いてくれよ……………」

拓海は懐から注射器と一体化した一つのカプセルを取り出す。

これが、ユーンとシヨークが徹夜で見つけてきた資料から作られた、対ゴーデス細胞の抗体。

これを、丁度露出している言葉の胸に目掛け、突き刺すように当てる。

「……………ッ!!」

びくんつ、と、意識を失っている言葉の身体が痙攣し、青白い光に包まれる。

彼女の身体を拘束していたマガオロチの触手が、逃げるように離れてゆき、言葉は解放された。

「言姉えっ!!」

触手から解放され、落下した言葉を、拓海が受け止める。

高校生の彼女の身体は重い、バリアジャケットを着ている拓海には問題ない。

「……………あ……………たつくん……………」

「言姉えー!」

抱き止められた言葉も、無事に目を覚ました。

多少疲れた様子だが、命に別状はないようだ。

「来て……………くれたんですね……………」

「ああ!来たよ!」

「ふふ…………私、また助けられちゃいました……………」  
「いいじゃん！別に！無事だったんだから……………」  
再開を喜ぶ二人。

このまま無事に帰還できればよかったのだが、運命はさらなる試練を降りかからせる。

『マスター！』

ストレイジが叫んだ。

「ど、どうした？ストレイジ」

『卵のエネルギーが急速上昇してます！早く逃げちゃいな……………』  
…………ボムツ！！

言い終わるより早く、眼前のマガオロチの卵が、爆発するように弾け飛ぶ。

「うわああ?！」

「きゃああつ?！」

吹き飛ばされる、拓海達。

言葉を抱き抱えたまま、なんとか空中で体勢を建て直す。

「あれは…………ツ!!」

拓海は眼前で、卵の残骸を押し退けて立ち上がる、巨大な影を見た。そう、あの影を拓海は知っている。

あれは、間違いない。

…………ギギヤアアアツ!!

天に向かい咆哮する、伸長70m体重8万tの、一本角の赤く禍々しい竜。

究極魔王獣・マガオロチ。

ウルトラマンオーブを苦戦させた魔王獣の長が、ついに生まれてしまった。

「マガオロチ?!」

『孵化に必要なエネルギーは、揃っていたようでございますな!』

……………本来は、ゴードス細胞によって強化させ、完全体である「マガタノオロチ」にまで強化させるのが、ジェラシーマスクの目的であった。

その増幅元であった言葉が途中で離れてしまった為にそれは叶わなかったが、孵化に必要なエネルギーは得る事が出来た。

……：「ウルトラギャラクシーファイト 大いなる陰謀」にて、「スラン星人」が同じようなやり方でマガタノオロチを産み出そうとした事があったが、失敗し、代わり「ゴードスマガタノオロチ」が生まれた。

幸運にもこの個体はゴードスマガタノオロチにはならなかったものの、強力な怪獣である事は変わらない。

ギギヤアアアツ!!

マガオロチが、拓海達に迫る。

マガオロチが強力な怪獣である事は、ウルトラマンオーブやその関連作を見た拓海は知っている。

「まずい！逃げろ！」

加えて今は、戦えない言葉を抱えている状態。

そもそも、いくら魔導師と言えども、70mもある大怪獣に勝てる訳がない。

できる事は、ただ一つ。

逃げる事だ。

言葉を抱えながら、どうにか逃げようとする。

ギギヤアアアツ!!

けれどもマガオロチは、拓海達を逃がしてくれる気は無いようだ。口を開き、「マガ迅雷」と呼ばれる光線を吐き出そうとする。

「まず………ッ！」

このままでは、避けきれない。

ディバインブロッカーで防ぎ切れる自信もない。

拓海が諦めそうになった、その時。

………ズドンツツ!!

突如、マガオロチが横から飛んできた光弾によって弾き飛ばされ、廃墟の中に倒れる。

援軍か?と思いい拓海が光弾の飛んできた方を向く。  
すると。

『何ボサツとしてんのよ!拓海!』

聞き覚えのある声と共に、一機の機体が拓海達の前を横切った。

それは、形状から見て「ステルス戦闘機」に分類されるであろう、白い機体。

そして、そこから聞こえた声の主は。

「あ、アリサ?!」

『あつたりー!』

なんと、そのコックピットに座っていたのは、拓海の間仲間でもあるアリサ・バニングスその人である。

「どうしてここに?!」

『イズミ博士に頼まれたのよ、ダイナウイングをテストしてつて』

「だ、ダイ……………?」

この機体のテストの為に、イズミに呼ばれたというアリサ。

前にも語ったが、拓海が死亡したのは2020年。

当然「SSSS・DYNAZENON<<ダイナゼノン>>」も知らないのです、アリサの乗る「ダイナウイング」がどういう機体なのかも、

原作とどう違うのかも知らない。

……………ギギヤアアアツ!!

状況を飲み込めない拓海が啞然としていると、倒れたマガオロチが立ち上がろうとしていた。

ギギヤアアアツ!!

よくもやってくれたな。

そう言うかのように咆哮し、標的を拓海達からダイナウイングに変更。

再び、マガ迅雷を放とうとする。

……………ドガアツ!!

今度は、逆方向から飛んできたミサイルにより、逆方向に吹き飛ばされるマガオロチ。



見れば、地上を疾走する二機の機影が見えた。

一機は、スポーツカーに似た姿で、ダイナウイングと同じく赤い部分が白く変色している機体「ダイナストライカー」。

もう一機は、潜水艦に似た姿で、最も原作と変更点が少なく、ホバークラフトのように地上を疾走する機体「ダイナダイバー」。

『私達もいるよ！拓海くん！』

『後は俺達に任せろ!!』

「すずか?!セントまで!!」

そして何の因果か、その二機にも、拓海の仲間が乗っていた。

ダイナストライカーには月村すずかが。

ダイナダイバーには佐藤セントが。

ギシャウウ………ウ?

よろよると立ち上がるマガオロチ。

その周囲を取り囲む、ダイナウイング、ダイナストライカー、ダイナダイバー。

その全てが、その機体に秘めたる武器を、マガオロチに向けていた。

『食らいなさい！スペースビームツ!!』

ダイナウイングからは、翼のビーム砲から放つ虹色のビーム「スペースビーム」が。

『ふいつ、フィンガーミサイル!!』

ダイナストライカーからは、機体先端の指のような部位から放つミサイル「フィンガーミサイル」が。

『ハイプレッシャーホーミングツツ!!』

ダイナダイバーからは機体上部のハッチから放つミサイル「ハイプレッシャーホーミング」が。

各々、マガオロチに向けて放たれた。

ギギヤアアアツ!?

光線、ミサイル、ありとあらゆる火力を叩き込まれたマガオロチは、断末魔の叫びと共に大爆発!

その肉片が、廃墟に転がった。

「すごい、あのマガオロチを………!」

その圧倒的な三機の力を前に、拓海は驚かされる。その一方、もしこれが公式の映像作品だったら、強豪怪獣を噛ませ犬にしたのかなんとかで相当荒れるな、とも思うのであった。

こうして、ジェラシーマスクの起こした怪獣テロ事件は解決。

ジェラシーマスクは他の転生者のように封印され、

言葉は検査と治療の為に、一時ミッドの病院に入院する事になったという…………。

……………

「ウム、流星は私、ビークル単体でもすごい力だ」

三機のメカの戦いの記録映像を見て、満足げに笑うイズミ。

「メカゴジラとダイナゼノンの合体、東宝と円谷の夢の共演…………燃えるねえ」

ここは、ユニオンベースの第四フロア。

そう、あの三機のメカは、ここで発見された物。

厳密に言えば、ここで発見された三機のメカに、別の壊れたメカのパーツを移植して動けるようにした、と言えればいいだろうか。

「…………でも」

イズミが、視線をやる。

そこにあるのは、二機の機体。

一機は、半壊した竜人のような人型ロボット。

とても、戦える状態ではない。

「やっぱり、合体ロボにしたいよねえ…………拓海くん？」

そして、拓海のジェミナスTS。

こちらも半壊しているものの、竜人型よりは原型を保っている。

…………どうやら、イズミはここで終わるつもりはないようである。

【ガジェットファイル】

・ダイナウイングA・B・C

分類：ビークル

原典：SSSS・DYNAZENON

イズミが、ユニオンベース第四フロアで発見したメカを改修した機体で、単にダイナウイングと呼ばれる。

ステルス戦闘機のような姿をしている。

原典と異なり白いカラーをしており、尾翼の部分が無くなっていく。

武器は虹色のビーム砲「スペースビーム」。

ちなみにA・B・Cというのは「Administrative

Bureau Custom（時空管理局カスタム）」の略。

パイロットはアリサ・バニングスが担当。

・ダイナストライカーA・B・C

分類：ビークル

原典：SSSS・DYNAZENON

イズミが、ユニオンベース第四フロアで発見したメカを改修した機体で、単にダイナストライカーと呼ばれる。

スポーツカーのような外見で、こちらも白いカラーをしている。

武器は機体先端から放つ小型ミサイル「フィンガーマサイル」。

パイロットは月村すずかが担当。

・ダイナダイバーA・B・C

分類：ビークル

原典：SSSS・DYNAZENON

イズミが、ユニオンベース第四フロアで発見したメカを改修した機体で、単にダイナダイバーと呼ばれる。

潜水艦のような外見で、こちらは原典との違いがほとんど無い。

潜水艦ではあるが、ホバークラフトのように地上を走る事も可能。

武器は機体上部から放つ誘導ミサイル「ハイプレッシャーホーミング」。

パイロットは佐藤セントが担当。

## 第5章 「クリスマスのシャケ騒動」 第17話

さて、食欲の秋が終わると、街は次のイベントに向けて様変わりしてゆく。

そう、一年の最後のイベントとして認知され、多くのカレンダーでも12月を彩るイベントとして描かれている、12月25日の聖なる一夜。

クリスマスだ。

「すつかり、街はクリスマスだあ……………」

海鳴もすつかりクリスマスムード。

商店街はクリスマスの飾り付けが目を引き、

お菓子屋さんはクリスマスケーキを売ろうと、

玩具屋さんはクリスマスプレゼントを売ろうと、

バチバチと火花を散らしている。

そんな街を見て、拓海は遠い気持ちになる。

子供の頃は、プレゼントやケーキ……………まあここでも妹と差別化されていただけ……………が楽しみで仕方なかったクリスマス。

けれども成長するに連れて、幸せそうな雰囲気とドン底の自分を比較してしまい、惨めな気持ちになった。

拓海はその世代ではないのだが、クリスマスの度に「クリスマス中止のお知らせ」と盛り上がったいた世代のオタク達の気持ちも解った。

悪乗りしてばか騒ぎしてるだけに見えたが、そうでもしないとやって行けなかったのだろう。

だが、今の拓海は違う。

9歳の子供という、純粹にクリスマスを楽しむ立場にいる。

かけがえのない友人達もいるし、何より……………美人で優しい恋人もいる。

もう、周りと自分を比較して惨めな気分になる事もない。はず、なのだが……………」

「……………なんで俺クリスマスに労働してんだろ」

「文句言わないの、あんたが言い出した事でしょ？」

拓海は今、アリサに連れられて海鳴の商店街を歩いていた。

その手には、重い荷物がいくつも。

まるで、デートで荷物持ちをやらされる彼氏のような。

「翠屋でのクリスマスパーティー、絶対成功させなきゃ！」

「気合い入ってんなあ」

「当たり前でしょ？クリスマスなんだから！」

事の始まりは、少し前。

学校で、今年のクリスマスはどう過ごすかという話題になった。

そこでののはが、実家である洋菓子屋さん「翠屋」にて、クリスマ

スパパーティーをすると提案。

なのはの両親も、これを承諾。

アリサはその為の飾り付けやら何やらの確保を引き受け、

言葉が未だミッドの病院から帰らない故に、クリスマスに予定のな

い拓海は、この手伝いを買って出た。

……………そして、荷物持ちをやらされているという訳である。

ちなみに、クロノはアースラメンバーと。

ユーノは、無限書庫でヘビクラ司書長と、二人きりで過ごすとの事。

「あらっ？」

ふとアリサが、本屋に並ぶある本を見つけた。

それは人気漫画「闘将！チャーハンマン」の最新刊。

宇宙からやってきたグウレイトな格闘家チャーハンマンが繰り広

げる、冒険活劇だ。

「チャーハンマン！新刊出てたんだっ！」

「アリサ、俺達クリスマススの買い出しに来たんだろ？これ以上は

……………」

荷物を増やそうとするアリサを、拓海が咎める。

そんな、平和なクリスマスではあるが、悲しいかな、平和は長くは

続かない。

「きゃあああー!!」

響く悲鳴。

そして、逃げ惑う人々。

誰の目にも、何かあったのは明らかだ。

「何だ?!」

では、何があったのか。

異変の中心に、拓海とアリサが目を守る。

そこには……………。

「……………は?」

それを見て、拓海とアリサは目が点になった。

そこに居たのは、あまりに非現実的かつ不自然で、なんというか、シユールの極みのような存在だったからだ。

魚。

そう、魚である。

魚丸々一匹が頭になっており、そこから下には人間の身体をがついている。

しかも裸の逞しい男体であり、黒いふんどしを履いている。

変態?

いや、それすら生易しい。

もはや人間とすら思えないというか、「ナマモノ」の類いと思えない存在。

それが、商店街で人々を襲っていた。

「……………アジ……………いや、アジヨット?」

拓海が呟く「アジ」とは、魚のアジの事ではない。

昔……………というか、今の「リリカルなのは」の年代において、ゲーム「ポケットモンスター」のデータ改造が流行った事があった。

アジは、そんな改造ポケモンにて生まれた存在であり、魚のアジから人間の下半身が生えたというシユールな物。

そのくせ、かなり強い。

そして「アジヨット」は、そんなアジの進化系であり、眼前のナマ

モノのようにアジから人間の身体が生えている。

「違うわ拓海」

「えっ?」

「ほら、あれはアジじゃなくてシヤケよ」

だが、アリサの指摘通り、あのナマモノにはアジヨットと違う所がある。

頭部だ。

アジヨットは、アジが頭になっている。

が、あのナマモノの頭はアジではなくシヤケだ。  
シヤケ、そうサーモンである。

すると、あのナマモノはシヤケットとでも言うのだろうか?  
と考えながらナマモノを見ていると……………。

「ハーツハツハツハ！俺様の名は「サモンスター・シヤツキー」！見ての通りの転生者だア〜〜!!」

なんと、そのナマモノこと「サモンスター・シヤツキー」は、自分から名乗ってくれた。

おまけに、自らが転生者である事も合わせて。

まあ、ここまで変な奴なら転生者以外にあり得ないだろう。

何故なら、「リリカルなのは」の原作にはあんな露骨に気持ち悪いナマモノは登場しない。

そして、そんなサモンスターは何をしているかと言うと。

「おい貴様あー!」

「ひいつ?!な、なんですすかつ?!」

運悪く近くに居たおじさんを捕まえ、脅すように迫る。

そして。

「クリスマスにチキンを食べるんじゃない!!」

「はあ……………?!」

何を言い出すかと思えば、おじさんがチキンを食べていた事に対して文句をつけてきたではないか。

これには、拓海もアリサも「何を言ってるんだこいつは」と硬直してしまふ。



「これは没収！」

「ああっ！チキンが!!」

サモンスターは、おじさんのチキンを取り上げて、持っていた袋に詰めてしまった。

そして。

「代わりにシヤケを食べるがいい！」

「ぐもっ?!」

どこから取り出したのか、焼いたシヤケの切り身をおじさんの口に押し込んだ。

「お前達も……チキンの代わりにシヤケを食べろっっっつ!!」

それに留まらず、サモンスターはやはりどこからか取り出したシヤケの切り身を、まるでキュベレイのファンネルがごとく飛ばし、人々の口に放り込んだ。

「あいつ……ぐむっ?!」

「むうっ!」

拓海とアリサも、口の中に焼きシヤケを突っ込まれる。

転生者が用意したシヤケ、毒でも入っているのか?と警戒したが……。

「……………美味いわね」

「……………そだな」

ただの焼きシヤケであった。

美味しい美味しい、ただの焼きシヤケである。

拓海は、ご飯があれば最高だなとも考えたが、目の前で暴れているサモンスターを放置はできない。

「やってる事はバカみただけど、止めるぞ！」

「ええー!」

焼きシヤケを食べると、アリサ共々見つからないようにビルの影に隠れる。

そして。

「フレイムアイズ！セーツトアーツプ!!」

アリサの着ていた水着が弾けるように消滅し、その上から新たな衣服……バリアジャケットが生成される。

アリサのそれは、ピンクを基調とした、どこかなのはのそれと共通性を感じさせるバリアジャケット。

カードの形態を取っていたデバイス・フレイムアイズは、剣の姿に変わる。

『ご唱和ください！我の名をッ！』

ストレイジが叫ぶ。

そして。

「ストレイジ！セー！ツトアー！ツプ！！」

気合いを入れて叫ぶ。

ストレイジを巻いた腕を上空に突き上げて。

瞬間、ミッド式魔法の魔方陣が広がり、光が拓海の身体を包む。

変身が始まった。

光の中で拓海の着ていた服は、黒いインナーシャツへ。

ズボンも、半ズボンへと変異し、靴は装甲のついた仕様に。

そして、なのはのそれに似た上着を感い、バリアジャケットの展開が終了する。

次は、ストレイジだ。

ストレイジは光に包まれ、その姿を大きく変質させる。

取っ手を中心に、六角形を上を薄く引き伸ばし、先端に穴を開けた二枚の刃が付き、そこに宝石が埋め込まれたナギナタのような近接武器形態。

そして左腕にも装備が現れる。

攻撃から身を守るデバイスブロッカーだ。

その、拓海の9歳の身体からすると大きめの盾が、ストレイジを握った手と逆の方に握られる。

最後に、ジャミングゴーグルが拓海の目を覆い、変身が完了した。

「そこまでだ転生者！」

「アアン？」

そんなベタな台詞と共に、サモンスターの前に立ち塞がるアリサと拓海。

この、一風変わった転生者との戦い、勝つのはどちらか………？